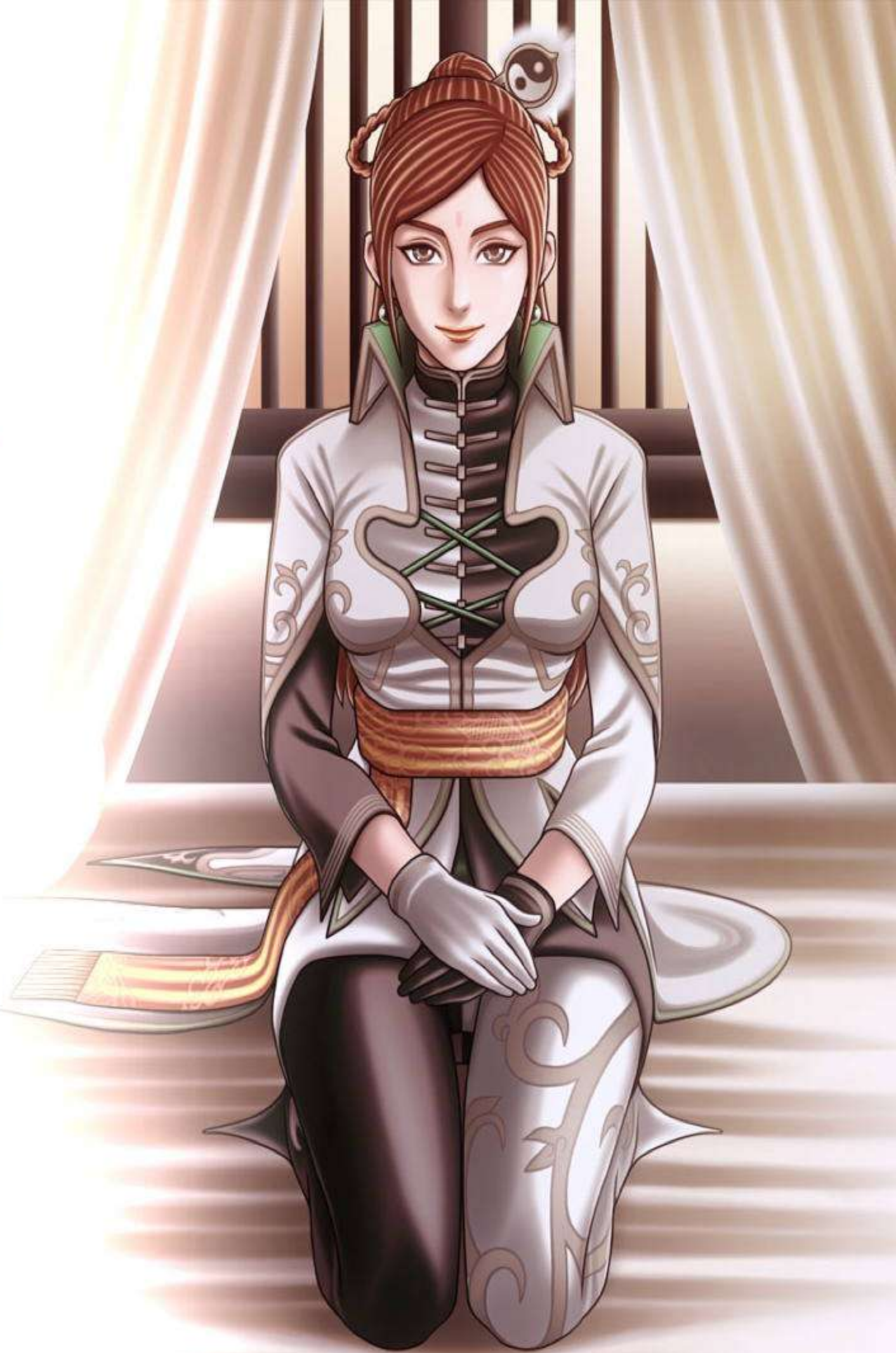


黄成 逢月

Kei Ormi
From Ormitedokou
Kou-Sei-Hou-Getsu



男が一人、歩いていた。

彼は成都で軍役に伏していたが、この度呼び出しを受けた。

何か重要な任務かと思い、男は足早に竹林を抜けていく。

しばらく山道を進むと、彼女の研究のための屋敷が見えてくる。

虎の戦車が、目印だった。



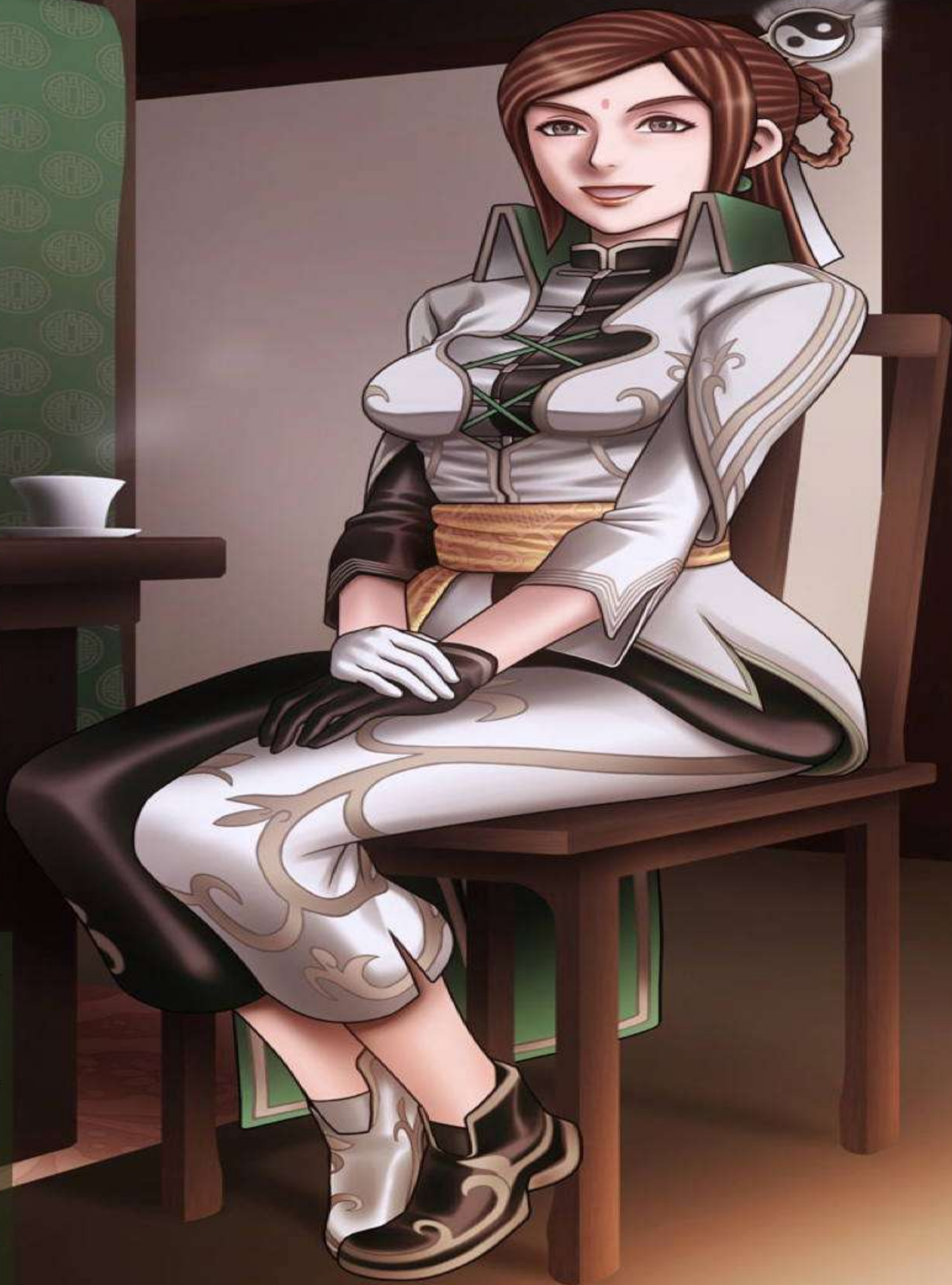
虎戦車が止まっていることを確認し、
玄関へと進んでいく。
そして扉の前に立ち、三度ほど
手の甲で戸を軽く叩く。
やがて屋敷の中から声が返ってくる。

「開いていますよ。さあ、中へ入りなさい」



確認を受けた後、玄関の戸を開く。屋敷の中を進むと、月英は茶を飲みゆつたりと椅子に腰掛けていた。多少不安に思えたが、顔を引き締め彼女に一礼する。

「来ましたね。あなたを待っていました」



普段と変わらず落ち着いた声で
月英は言う。

奥の部屋へ案内され、二人が進む。
気のせいかな、前を進む彼女が
少し楽しそうに見える。

「これから、私と一晩過ごしていただきます」

奥の部屋は寝室だった。

月英に素早く後ろに回りこまれ、出し抜ける。
そう言われる。

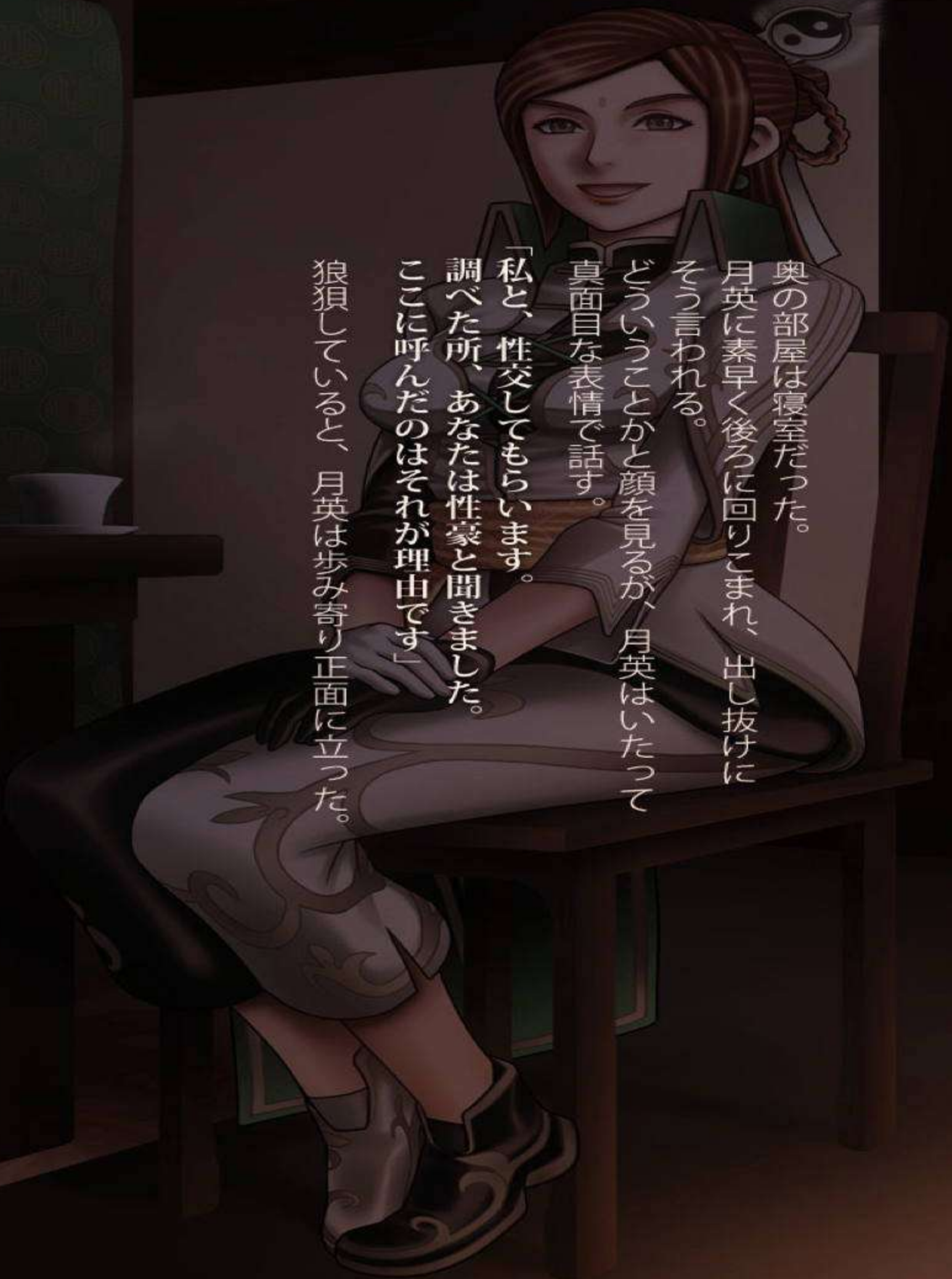
どういふことかと顔を見るが、月英はいたって
真面目な表情で話す。

「私と、性交してもらいます。」

調べた所、あなたは性豪と聞きました。

ここに呼んだのはそれが理由です」

狼狽していると、月英は歩み寄り正面に立った。



「何も心配いりません。
この月英に全てお任せを」



頬に手を当てられ、安心するよう諭される。思いもよらぬ話だが、一夜だけならばと思ひ、任せても良い気持ちになる。

「それでは まずは座って下さい」

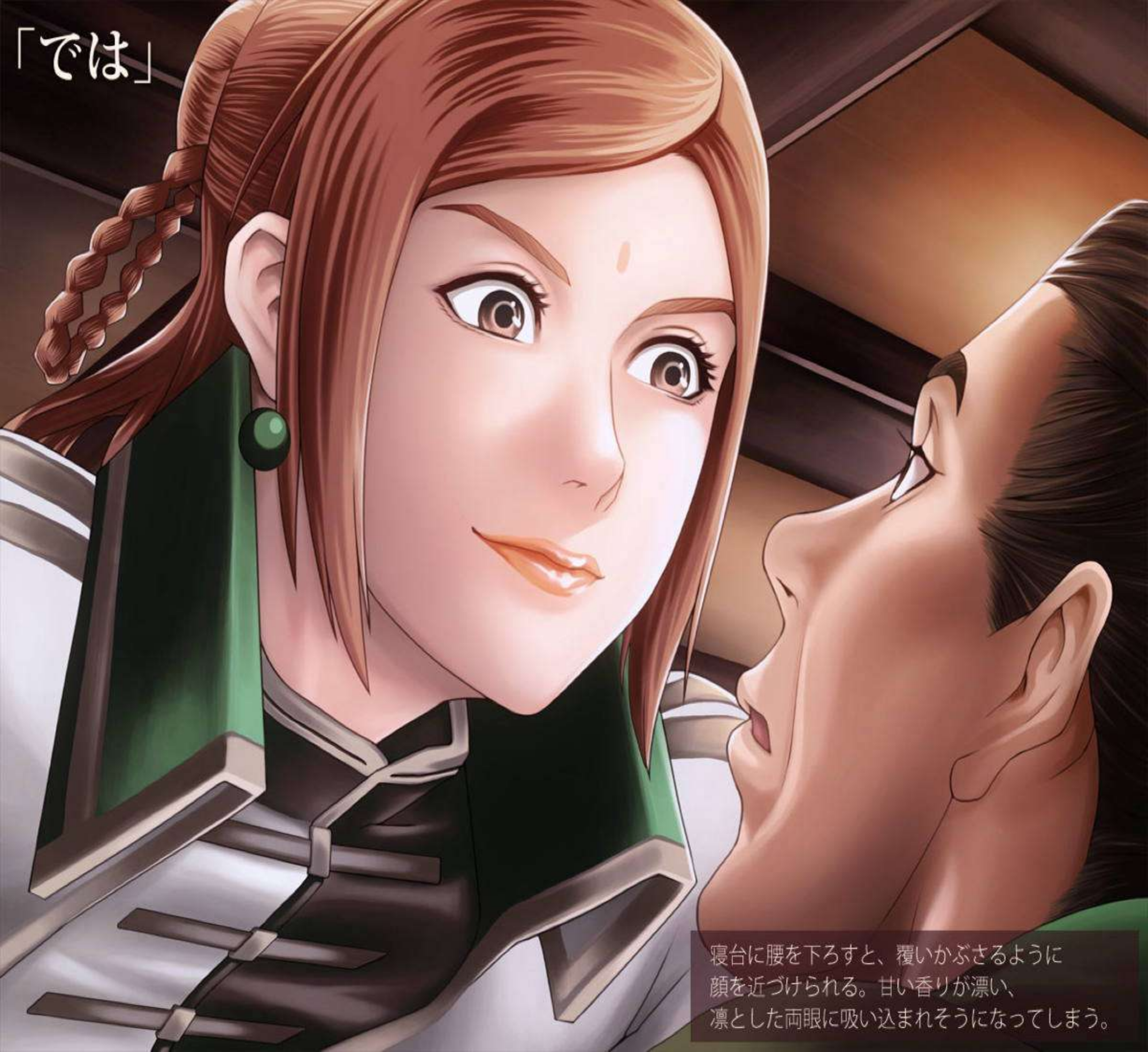
月英の両手が肩に乗せられ、後ろの寝台に座るよう促される。

腰を下ろすと、月英は中腰になりこちらに顔を近づけてくる。

「早速始めましょう。」

お互いに、良い一夜にしたいものです」





「では」

寝台に腰を下ろすと、覆いかぶさるように顔を近づけられる。甘い香りが漂い、凜とした両眼に吸い込まれそうになってしまう。

「んっ んむ…
ん——……」



優しく口づけされ、月英の唇の柔らかな感触が伝わってくる。舌の先がこちらの口へ割って入ろうとし、その動きに素直に従う。

「んふっ んむ
んっ んっ」



舌と舌が絡められ、味を確かめるように何度も舐められる。次第に舌の動きが激しくなっていく、されるがままに舐め回されていく。



「んむ——…
ん——…」

む——……

んむ——……

舌が深く入り込み、口内をくまなく舐めていく。
こちらも応えて、月英の口内を舐める。
互いに唾液を流し込み、舌を同時にしごき合う。

「はあっ。
美味です」



口が離され、こちらの口と舌が解放される。
混ざり合った唾液が糸を引き、光る。月英は
こちらの口元を見て、満足げな表情を浮かべた。

「さあ

次は、上をははだけて」

口周りの唾液を指で拭った後、月英は舌で舐め取りゴクリと飲み込む。言われる通りに上半身裸になると、品定めするかのように丹念に体を触られる。

「ふむ」

そしてやがて胸に顔を近づけてくると、こちらの乳頭をゆっくりと指で擦り始める。

「可愛い乳首です。
転がしてあげましょう」

胸板に頭を密着させ、
月英はこちらの乳首を舐める。
鼻息がこそばゆく、舌先で転がさ
れる乳頭は唾液に塗れていく。

「やはりここは敏感ですね。」

硬くなってきました。
良いですよ」

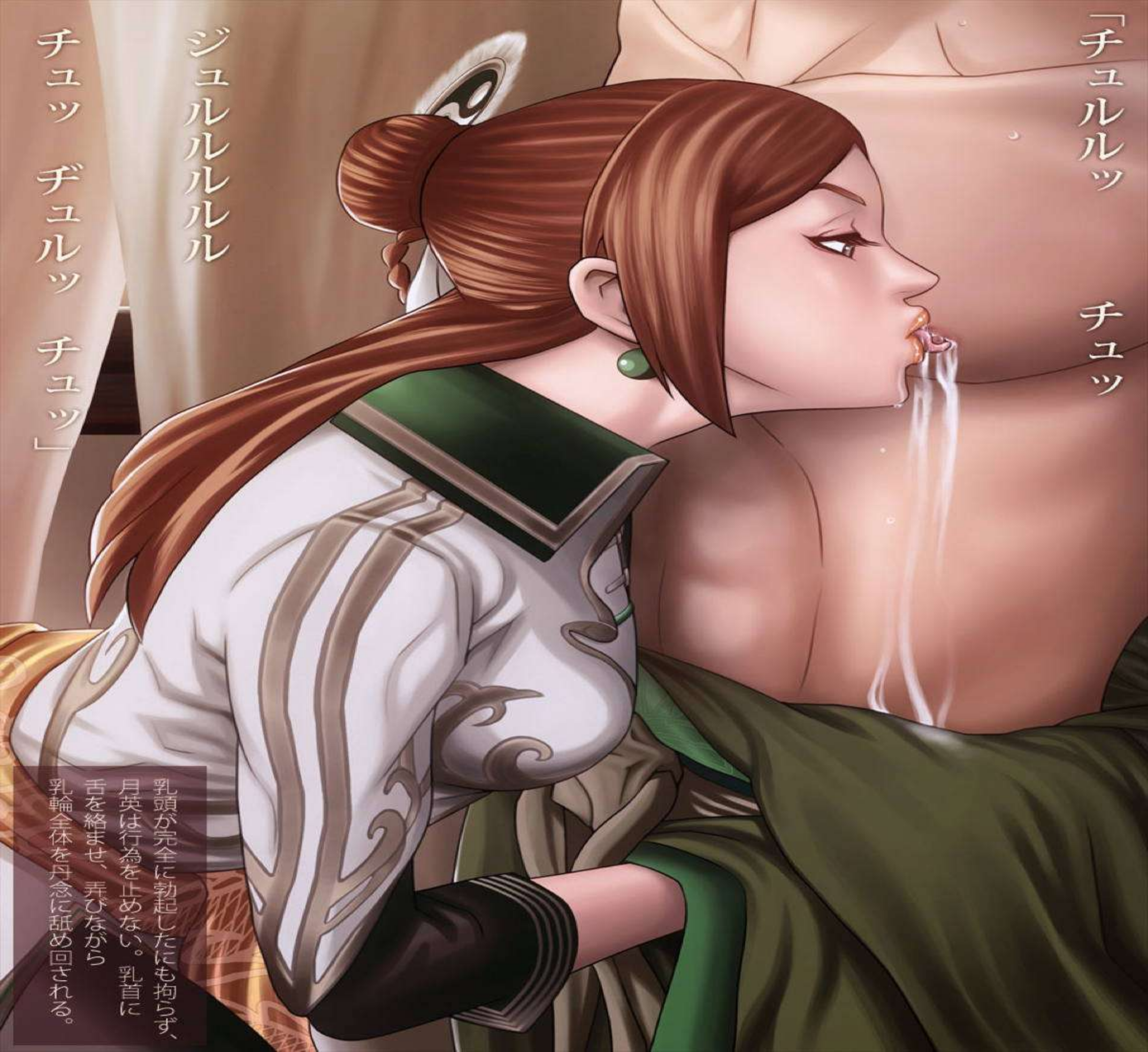
乳頭を上下の唇でグッと固定され、吸われながら小刻みに前後にしがかれる。唾液が潤滑油として使用され、とても心地が良い。

「チュルルツ

チュツ

ジュルルルル

チュツ チュルツ チュツ」



乳頭が完全に勃起したにも拘らず、
月英は行為を止めない。乳首に
舌を絡ませ、弄びながら
乳輪全体を丹念に舐め回される。



「凄く硬くなりましたね。
乳首も… こちらのほうも」

頭を密着させながら月英は
ゆっくりと腰を落とし、下腹部に
顔を擦りつける。性器が緩やかに
愛撫され、股間への頬擦りが続く。

「この匂い…興奮しますね」

左の手も乳首から離され、
手早く腰帯をほどかれ衣服を脱がされていく。

「さあ、見せてください」
下腹部を露出すると、こちらの陰部を
まじまじと見つめられる。



「あらまあ。これは良い性器ですね」

勃起した性器を嘗め回すように観察される。亀頭の形状、陰茎の太さ、色とツヤ、さらに陰囊の形質までじっくりと見られていたようだった。

「私の見立ては、
間違っていないなかつたようです」

月英はこちらを見て自信ありげに
言い放つ。彼女が話す間にも、
吐かれる息が亀頭にかかる。
気持ちが悪くなり、陰茎が上下に
ピクピクと揺れ動く。

「ふーむ」
チュツ
チュチュツ

「んん」

「なるほど」

陰茎を鷲掴みにされ、吐息の
かかるがまま亀頭の先端に口づけ
される。唇を擦りつけられて、
亀頭には幾度となく
接吻が浴びせられていく。



「あーん む
尿道も頂いてしまいましたよろ」

舌の先が尿道口をこじ開けて
中をテロテロと舐め始める。
月英は手馴れているらしく、
丁度良い刺激を与えながら
こちらの反応をしばし観察する。



「気持ち良いですか？
舌を入れられるのもお好きなようですね」

尿道口は依然として攻め続けられ
唾液で濡らされていく。
こちらが快感に耐えていると、
月英は見透かしたかのように
さらに舌先の動きを早めていく。

ジュルルッ
ジュルルッ

ズゾゾッ

「んん…んんんん」

月英の口元の動きが変化し、強く亀頭の先端を吸い上げる。先程の細やかな快感とは打って変わった強い刺激に体が反応し、腰がひくついてしまう。

「ふふ
綺麗になりました」

分泌された腺液と唾液で亀頭は
べとべとにされている。月英は
それを舐め取ろうとはせず、一層
混ぜ合わせるかのように舌裏で
グリグリと舐め上げていく。

「中々の性器：いえオチンポです。
期待が持てますね」

液が垂れても気に留めず、
月英の亀頭の先端の舐め上げは
続けられる。尿道口の周りは
多少ふやけてきていたが、
それでも舌は離されなかった。

「私のお口、忘れられなくなりますよ」

月英は陰茎を掴んだまま自分の位置をずらし、
亀頭を正面に見据えた。
眼前の性器を見下ろして、何か
考えを巡らせているようだった。

「やはり口腔全体を使って刺激しなくては
いけませんね」

やがて、その口が亀頭に向けて開かれる。

「んっ」



陰茎が根元から握りしめられ、口の前に固定させられる。
月英は口を開け、舌の腹で亀頭の先に触れていく。
分泌されていくこちらの腺液がそこにタラリと乗せられる。

「もう少し味わっていたい所ですが…
いきますよ」



舌に亀頭を持ち上げられ、口唇がさらに広げられる。亀頭の先端が生暖かい吐息に包まれ、月英は徐々に前傾を始めていく。性器が口内に飲み込まれるさまをまざまざと見せ付けられる。

「はむっん　んっ　ん　んんっ」



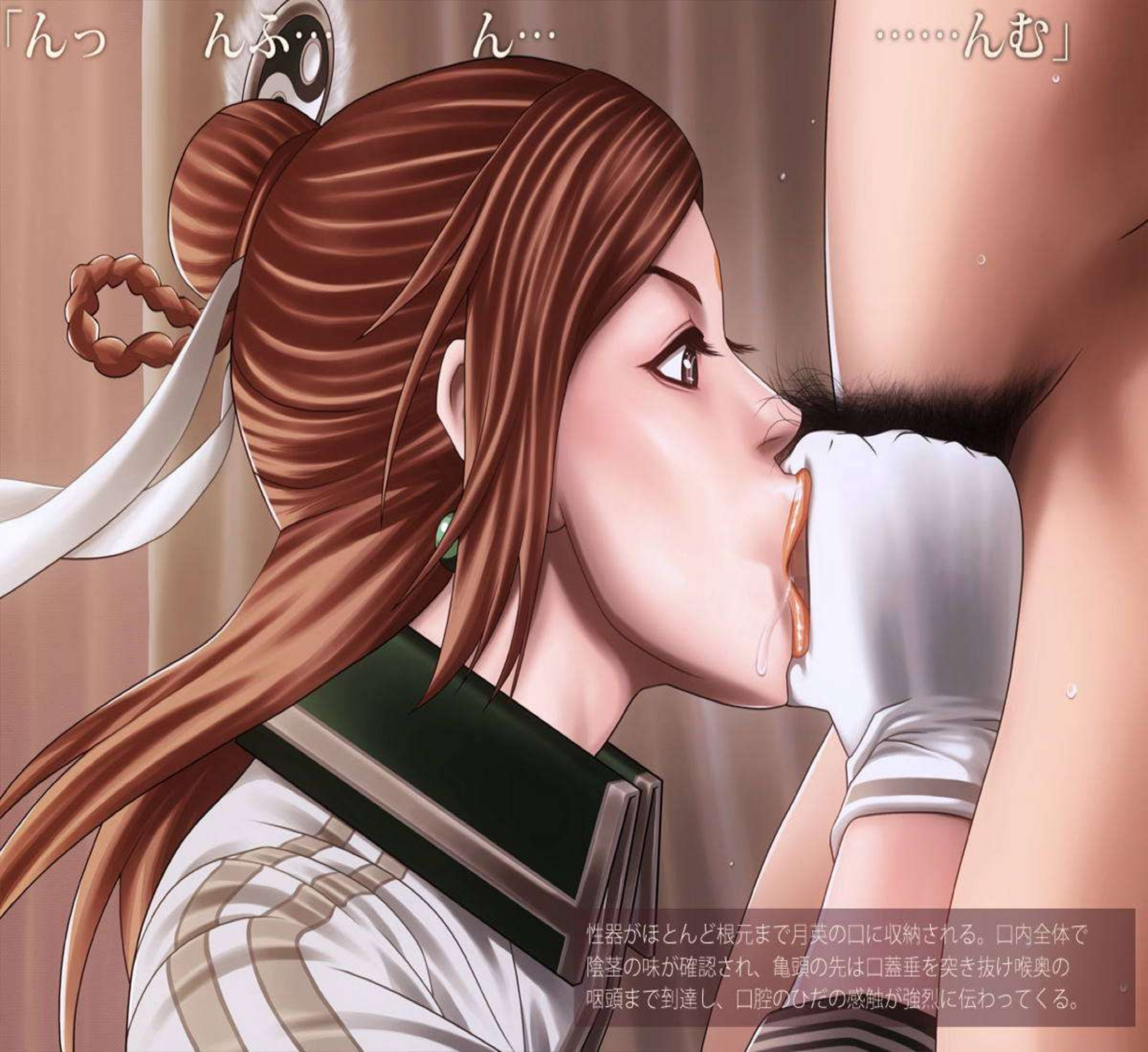
口腔に性器が飲み込まれていく。舌の先とその腹部が、亀頭から陰茎の裏筋にかけてねっとり這い進む。口壁は強めの吸引で亀頭にピタリと密着し、形に沿って性器を摺りあげて来る。

「んっ

んふ…

ん…

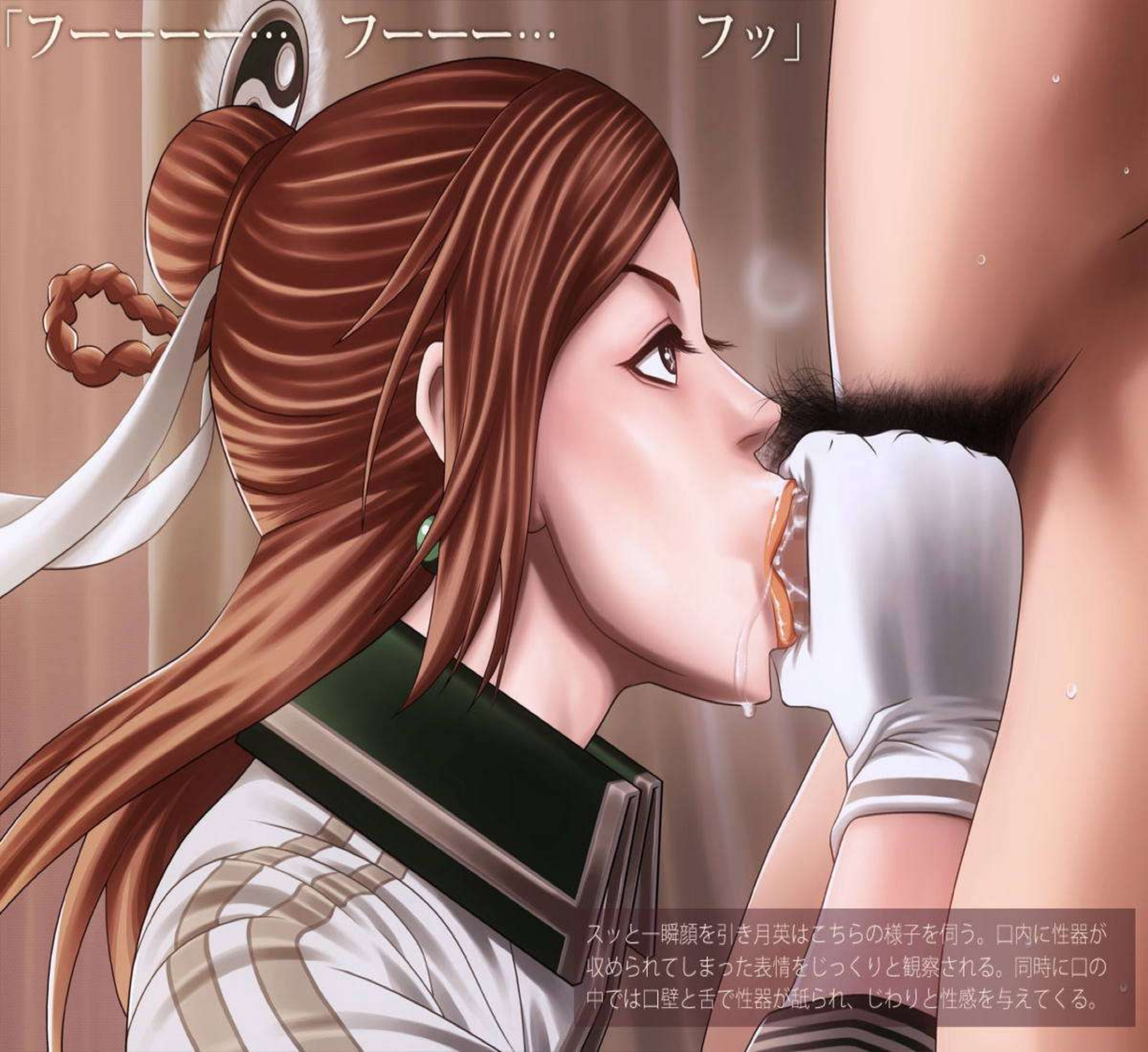
……んむ」



性器がほとんど根元まで月英の口に収納される。口内全体で陰茎の味が確認され、亀頭の先は口蓋垂を突き抜け喉奥の咽頭まで到達し、口腔のひだの感触が強烈に伝わってくる。

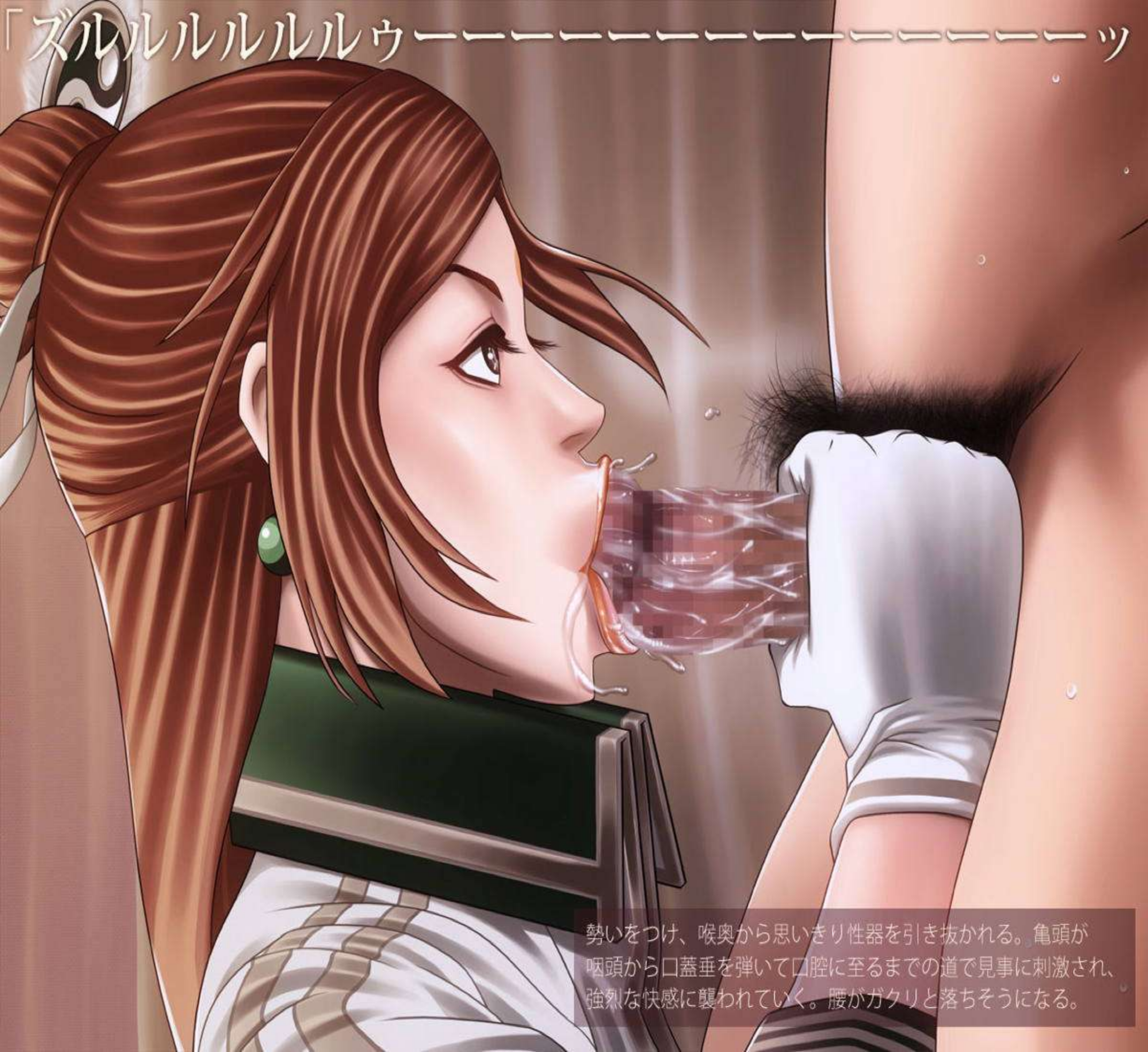
「フー……フー……」

「フツ」



スツと一瞬顔を引き月英はこちらの様子を伺う。口内に性器が収められてしまった表情をじっくりと観察される。同時に口の中では口壁と舌で性器が舐られ、じわりと性感を与えてくる。

「ズルルルルルウー—————」ツ



勢いをつけ、喉奥から思いきり性器を引き抜かれる。亀頭が咽頭から口蓋垂を弾いて口腔に至るまでの道で見事に刺激され、強烈な快感に襲われていく。腰がガクリと落ちそうになる。

「ブポポッ ズルルッ んふうっ ブポポッ



今度は逆の動きで、一気にまた根元まで飲み込まれる。月英の口腔は真空状態となり、亀頭はまたも口内から咽頭まで引き込まれる。陰茎も口壁が密着し、引き続き猛烈な吸引をされていく。

「ヌポッ ブポッ ヌポポッ ブポポッ ヌブッポッ



陰茎から亀頭にかけてまたも引き抜かれ、素晴らしい性感を与えられ続ける。口唇は亀頭の雁首を捕まえる役割を果たし、口内では舌が縦横無尽に動き回って、亀頭を刺激し続ける。

「ヌボブポッ ヌボブポッ ブポッヌボッブポッヌボ



月英の口腔は性器の形と一体となり、陰茎を受け入れる為の穴と化す。反復運動の動きがどんどん速さを増し、高速化する。こちらの性感は高みに達し、睾丸から陰茎へ精子が昇ってくる。

「まだ出しては駄目ですよ」

月英の動きが急停止する。

射精の予感が察知され、素早く口を引き抜いて陰茎を、さらに陰囊の裏を強く指で押さえられる。尿道が圧迫され射精することが出来ない。月英はにこやかに笑った。

「竿だけでは物足りないでしょう。隅々まで舐めてあげます」

射精への衝動が収まってくると、月英は亀頭を指でつまみ持ち上げ、股下を覗き込んだ。

「んー…」

裏筋もきちんと舐めない」と



龟头を軽く指でしてかわれつつ、
裏筋にチロチロと舌先が這う。
もう片方の手は、睾丸を愛でる
ように陰囊を揉みしだしている。

「はぷんっー！」



「んぐ んぐっ
んもっ んーんーんー」

月英の口が陰囊へパツクリと
かぶりつく。食べられた睾丸は
口壁と舌に寄り添われ、何度も
コロコロと弄ばれて転がされる。

「ぷはあっ」

「はあっ
はーっ」

「はーっ」

思う存分に睾丸の感触を楽しみ
味わわれた後、陰囊が勢い良く
口から放り出される。
亀頭も怠入りにしごかれ続ける。



「そろそろですか？」

「頃合ですね。」

「良いでしょう。」

「射精させてあげます」

陰茎一帯は月英のものになつたかのようにその手に収められていた。手の動きが止まり、満足そうにこちらを見上げた。

「もう限界でしよう。 ゃあ」

体勢を正し、月英は眼前の性器を見つめる。

「精液は全て、私の口の中へ出してもらいます」

そう言うのとまた亀頭を頬張り、唾液を絡ませて
口腔でじっくりとしごき始める。

「遠慮せずに思う存分射精するのですよ」

徐々に、徐々に、月英の動きは速さを増していった。



「いつでも出して結構です。」

「ああ、思い切り射精して下さい。」

月英は、射精させる動きに特化していく。高速で前後の反復運動がなされ、口内の圧力が高まる。密着した口壁により亀頭は小刻みに、幾度も素早く強くしごかれる。

ブポブポブポブポブポブポブポブポブポブポブ

ブポブポブポブポブポブポブポブポブポブポブ

反復運動は速度と精密さをさらに増す。
こちらの快感は頂点に達し、月英の口腔に
性器を委ね、腰を任せる。
精液が尿道を通り龟头へと昇って行く。



「んっ」



ジュルルッ

口内に思い切り射精する。月英は待っていたかのように瞬時に動きを止め、最も良いと思われる位置で、亀頭から勢い良く放たれていく精液を受け止める。

「んんっ」

「ん！」



放たれる精液は喉奥の咽頭を直撃する。口内の動きも既に止められ、精液を受け入れる。口蓋垂にも精液がぶつかり、口腔に精液が出されていく。

「んんーんっ」

「んんっ」



射精が続く。放たれる精液の量がさらに増えていく。月英は液の量が尋常では無い事に気づき、表情が険しくなる。口内には続々と精液が溜まっていく。

「ん……ん」

んん。

「んんん」

ルルッ

ピュルルッ

射精が止まる。口内は静かなものとなる。
余韻を味わうように、月英も動かない。
やがて、口壁が、射精の終わった龟头を
褒めるかのように、ゆっくりと撫でた。



「チュウウウツ

チュルンツ

チュウウウウ」



口壁が圧力を高めていく。さらに亀頭は吸引され、尿道に残った精液が搾られる。月英の口壁は、敏感になっている射精後の陰茎をじっとりと締め上げていく。

「ンチユウウウウ〜ツ

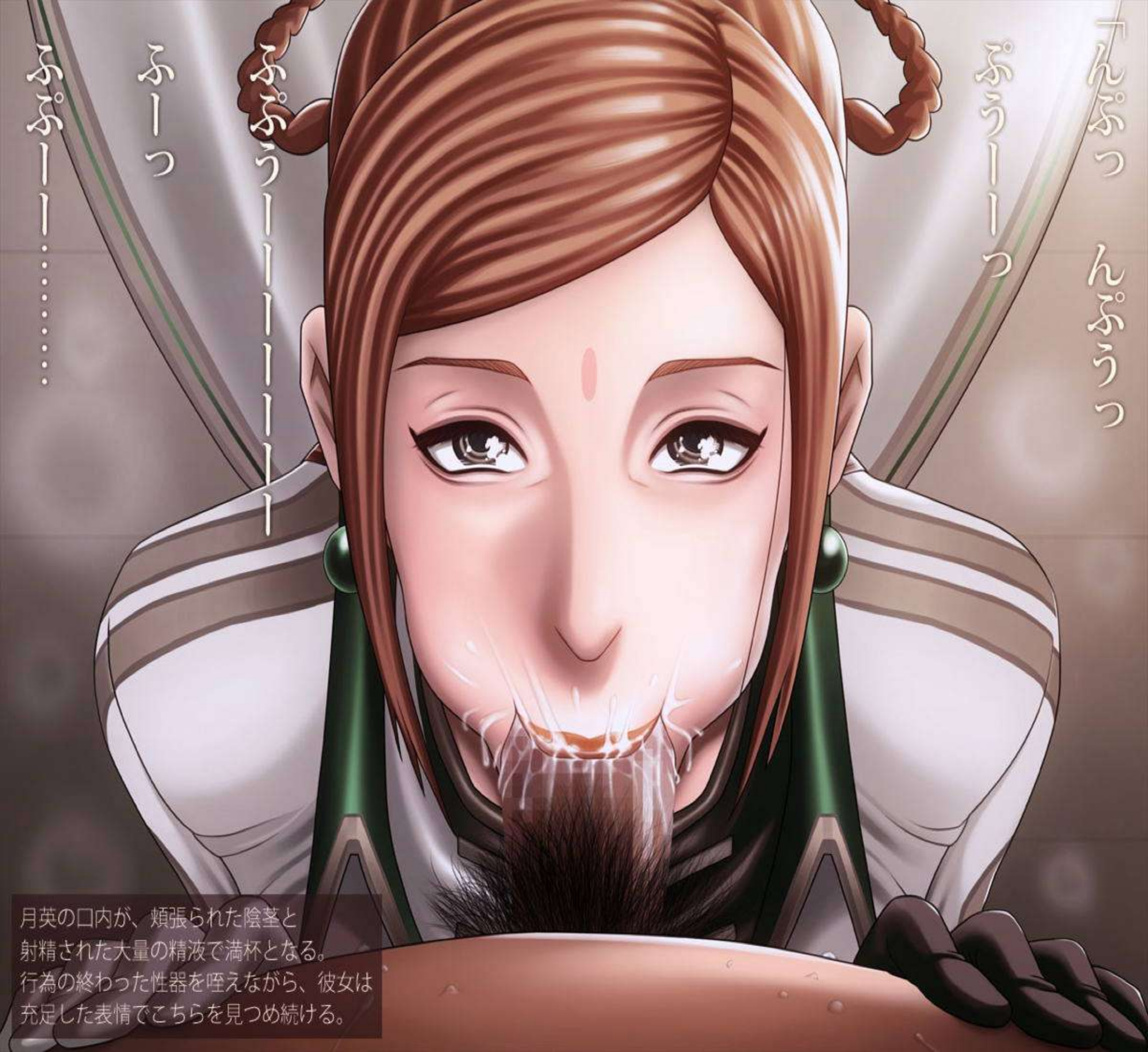
チユルンツ

ジュルロツ

チユウウウウウウウウウウ」

圧迫がさらに増し次々と精液が吸われる。吸引もより強くなり、頬の肉が亀頭から雁首へと密着してより力を増す。残った精液は、最後の一滴まで搾り取られる。





月英の口内が、頬張られた陰茎と
射精された大量の精液で満杯となる。
行為の終わった性器を咥えながら、彼女は
充足した表情でこちらを見つめ続ける。

「ずぞぞぞつ ずぞぞぞぞぞ

んぷうーつ

ずちゆるつ

んぷーつ

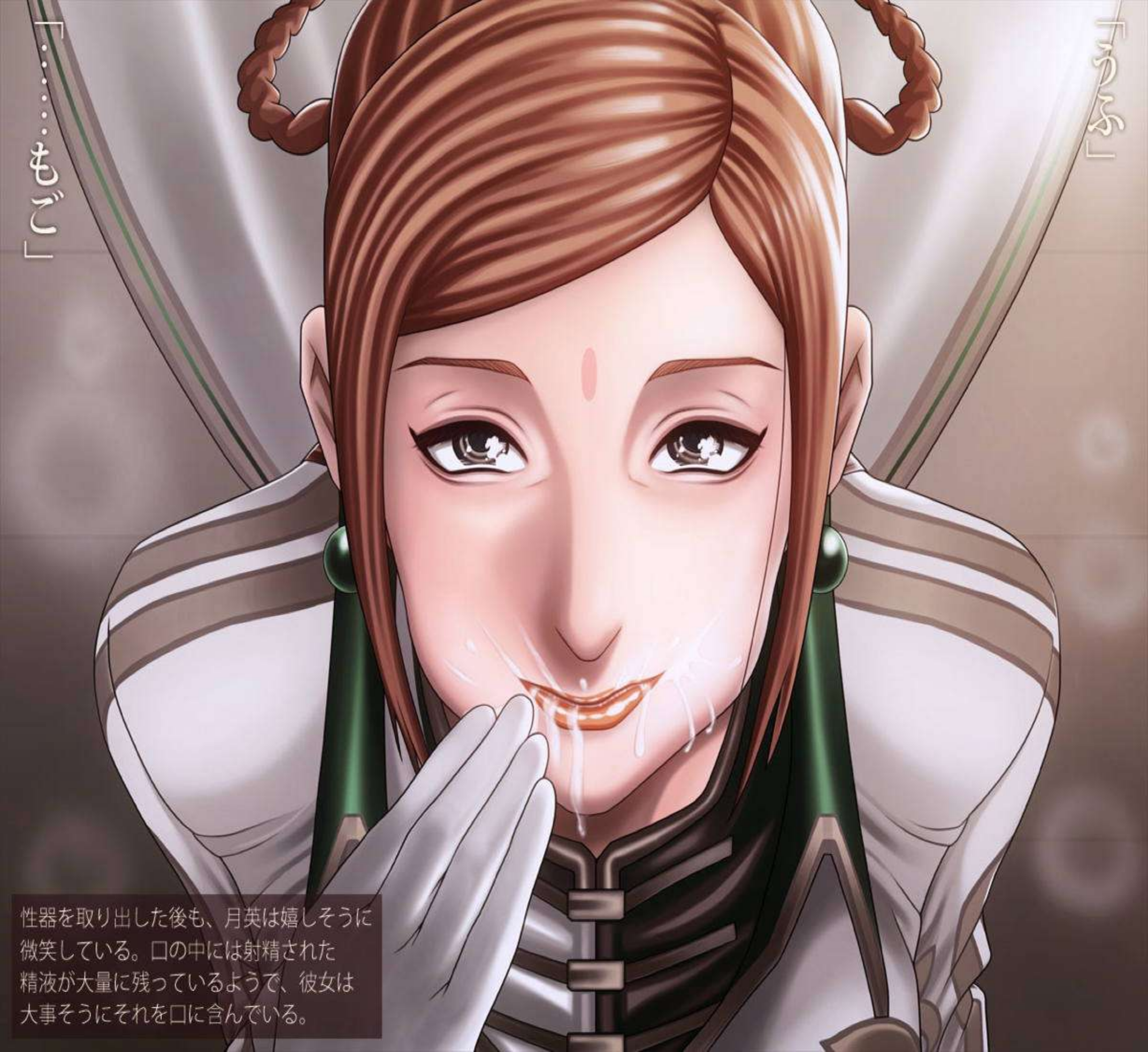
ずぞつずぞぞぞぞつ

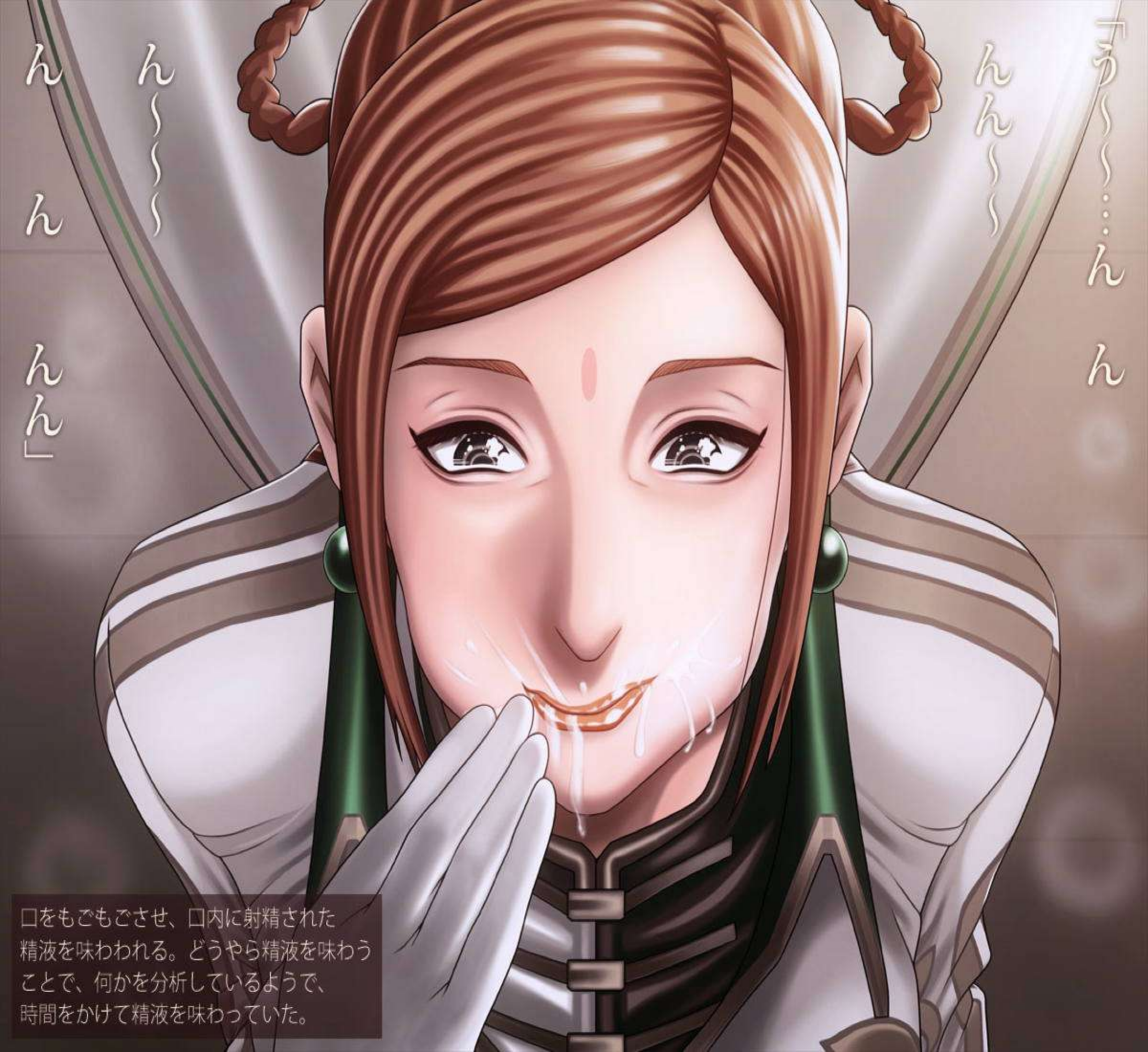
役目を終えた陰莖が月英の口の中で徐々に縮小していく。小さくなっていく亀頭を愛らしく思ったのか、しっとりと吸われ続ける。

「……………」

「……」

性器を取り出した後も、月英は嬉しそうに微笑している。口の中には射精された精液が大量に残っているようで、彼女は大事そうにそれを口に含んでいる。





口をもごもごさせ、口内に射精された精液を味わわれる。どうやら精液を味わうことで、何かを分析しているようで、時間をかけて精液を味わっていた。

「あは」

「ふいひ量でふね。」

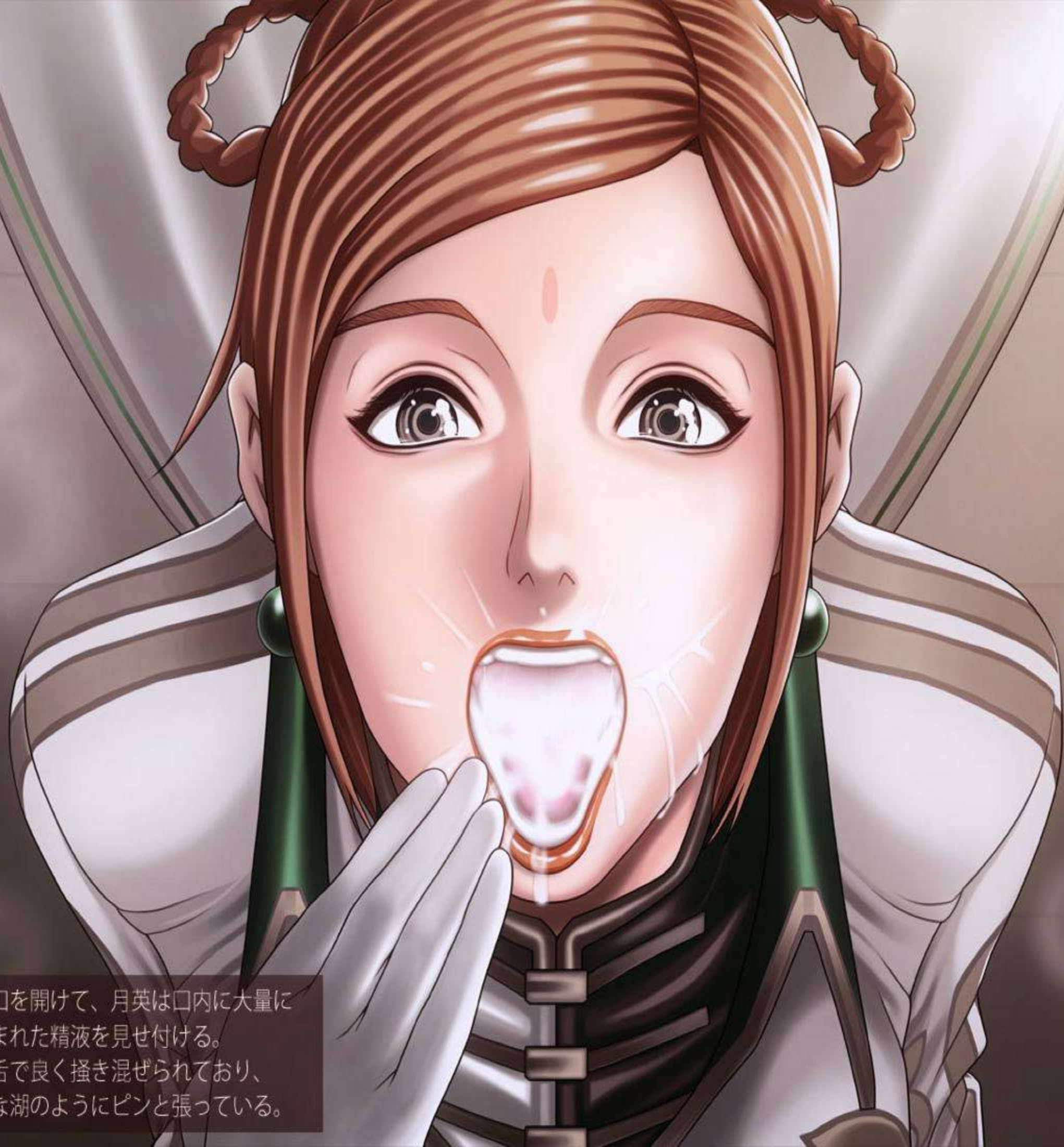
「たくさん出ひてくれへ嬉ひいぢふ」

満足したのか、月英はこちらを見て言葉を投げかける。声を発する度に、トロトロとした精液が口腔にたっぷり溜まっているのが見える。



「ふおれえあ」

「あー」



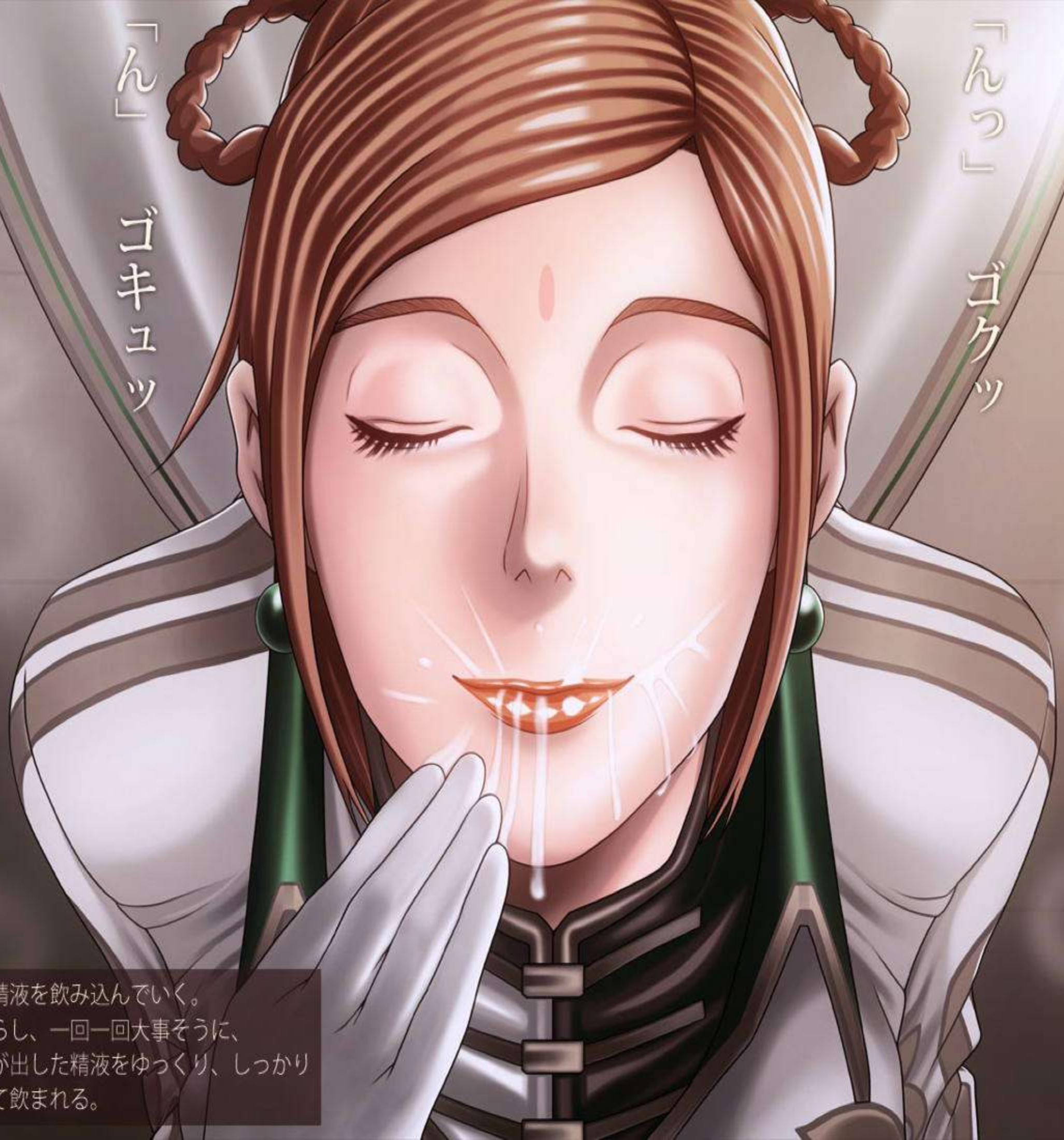
大きく口を開けて、月英は口内に大量に注ぎ込まれた精液を見せ付ける。精液は舌で良く掻き混ぜられており、真っ白な湖のようにピンと張っている。

「ん」
ゴクリッ

「んっ」
ゴクッ

「ん」
ゴキユッ

「んー……」
ゴクリッ



月英は精液を飲み込んでいく。
喉を鳴らし、一回一回大事そうに、
こちらが出した精液をゆっくり、しっかり
味わって飲まれる。

「ふはあっ」

「はあ……ああっ」

久しぶりの精子……

美味しくて

全部飲んでしまいました」

精液を綺麗に一滴も残さず飲み込んだ月英は、とても嬉しそうな表情でこちらを見つめる。精飲を終えた事の充足感が、こちらに伝わってくる。

「私のお口は如何でしたか？」

お気に召したのなら
いつでも射精させてあげましょう」

舌を動かし、挑発的な視線をこちらに投げかける。月英の口は艶かしく動き、今まで性器がそこに入っていたと思うと、堪えられないものがあった。

「さあ

次はあなたが攻める番です」

そう言っていると月英は立ち上がり、上着の止め具を外し始める。
こちらの眼前で徐々に上着が脱がされ始め、
月英の素肌が露出していく。

「胸からお願いしますね」

一言言いつと、にこりと笑う。
良く見ると、頬が少し紅潮しているのが判る。

「あなたの
好きにして下さい」



上着の釦を取り外して、月英は服をはだける。胸が露出し、二つの豊かな乳房が目の前に置かれる。

「あっ！ ああっ
はっ…激しいですっねっ」



言われた通りに両手で思い切り
乳房を掴み、好きに揉む。
月英は驚きの声を上げたが、
構わず手を動かし刺激を続ける。

「あっ！ ああ 良いですっ
その…調子ですっ」

揉み上げ押し付け、握り締めて
回し伸ばし、引っ張り、時には
こねるように優しく撫で、長い
時間をかけて様々に刺激する。



「はっ…あ。
乳首ですか」

「どうぞお好きに」

胸を揉んだ後、乳首を刺激する。
片方は口で吸い、舌で舐め上げる。
もう片方は指を使って、
じっくりと弄り回していく。



「ん」
「ん」

「ん……ん」

「ふう……ん」

吸い付きを続け、舌先を使って
口内の乳頭をしごく。乳輪も
舐めつける。反対側も、指先で
乳頭を強くしごき続ける。



「んっく」

「んっ」

「ん…ん」

「んっ…んっ…んっ」

月英の息が少し荒くなってくる。
吸引を強めて、舌を素早く
動かす。反対側も速度を早め、
指の腹を使って強くしごく。



「あ」

「ふあう」

「ふうあう」

「あっ あっあ」

喘ぎ声が甘くなってくる。更に吸引を強め、舌も動きを高速化させる。指の動きもそれに乗じ、さらなる刺激を与え続けていく。



「あぁっ」

「ふぁぁっ」

「ふぁぁっ」

「あっ
あっ
あっ」

徹底的に吸い付き、舌を動かして、指でしごき乳首への刺激を続ける。やがて少ししずつだが、月英の乳首が硬さを増してくる。



「ああ……」

ふあああ……

駄目……

ああ……
こんな
長くだ……なんてっ」

刺激に耐えかねてきた様で、
喘ぎ声が続なくなってくる。
こちらの熱心な攻めによって、
乳首はどんどん硬くなっていく。



「駄目っ

ああっ
駄目ですっ

ふああっ
もうこれ以上はっ
あっ あっ あっ あ

月英は駄目だと懇願するが、動きを止めずに舌と指で硬くなった乳首を愛撫し続け、また吸い続けて刺激し続ける。



「……ふー……」

ふー……

ふー……

「ふー……」

口と指を、胸がらそつと離す。
蒸気が周囲に立ち昇る。
乳首は完全に勃起し、
ピンと硬く立ち上がっている。



「……ふふふ……」

ふー……

ふ……うん

良かったですよ……中々」

月英はこちらに労いの言葉を投げかける。刺激され続けた乳房は汗で艶やかに光り、勃起した乳首からは唾液が滴る。



「ひゃっ

また
乳首いつ

ふああっ

もうっ

駄目っ 駄目なのにないつ」

間髪入れずにもう一度乳房に
吸い付く。勃起した乳首を舌で
転がし回し、指でつまんで引っ
張り、また刺激し続ける。



「もう…これでは
我慢出来なくなってます」

存分に胸を刺激された後、月英は大きく息を吸って
荒くなった呼吸を整え直す。
そして寝台の奥へと進んで行き、仰向けに寝そべった。
両足を大きく開いて、
彼女は傍に来るように誘いかける。



「さあ。
愛撫を始めましょう」



月英は両足をゆっくりと横に開いて、
下腹部をこちらに見せつける。
近寄って脚衣を脱がすよう指示され、
言われた通りに脱がしていく。

「見えますね。
濡れてしまいました」



脚衣を脱がせていくと、性器の辺りに
多少の湿りがあった。見てみると
やはり下着には染みが出来ており、
うっすらと女性器の形が浮かぶ。

「下着の上からですか。
それも趣きがありますね」



下着の上から外陰部をゆっくり擦る。
薄めの布はじんわりと湿り、指先には
女性器の柔らかな感触が伝わってくる。
円を描くように優しく撫でていく。

「あっ！ そんな……………」



いきなり指をずぶりと刺す。
膣口が強く指先を圧迫し、その奥の
膣内はさらに締まるであろうことを、
こちらに想像させる。

「これが私の
女性器…おまんこです」



下着も脱がせ、外陰部が露わになる。
陰毛は綺麗に整えられ、ふっくらした
大陰唇に沿う。小陰唇はやや紫がかっ
ているが、健康的な赤みを帯びている。

「ああっ！
いきなりですかっ」



早速膣口に指を入れて、膣内の状態を確かめる。膣内はそこそこ濡れてはいるが、まだ本格的に粘液が分泌されていない。

「あのっ 拡げて観察するのは
よして… 恥ずかしいですからっ」



指で小陰唇を引っ張り、左右に拡げる。陰核は包皮に包まれており、その姿を見せない。膣口は月英が息をする度にひくひくと動き、じとりと濡れてくる。

「はあううっ」



性器に口をあてがい、陰唇を舌と唇で舐め回す。陰唇を隅々まで舐めた後、次は膣口に舌を入れ内部を舐め回す。繰り返す、何度も性器を刺激する。

「あっ
んあっ
ああっ
あっ
ふあっ
あっ
あっ」



二本の指を膣口へ突き刺し、強い刺激を与える。小刻みに何度も出し入れし、膣壁をしごく。陰核部分の皮を剥き、露出した陰核を丁寧に愛撫する。

「ん…流石…ですね…。
ふう…中々…良いですよ…」



性器が、愛撫により分泌された粘液とこちらの唾液とで十分な濡れを見せる。陰唇は充血し開きを見せ、陰核も刺激を受け膨張し、固くなっている。

「あはあああっ そんなっ
まだするんですかあっ」



さらに性感を与えるため、再び性器に
むしゃぶりつく。月英は声を上げるが、
声色に歓喜が入り混じっている。
そして何度も性器を刺激していく。

「ひゃあああああっ あっああ
んあっひああっんうあああ」



ぎっちり口を性器に押し付け、
陰唇から膣口、膣内から陰核に至る
まで、全力を持って舐め回す。月英は
それに喜び、大きなよがり声を上げる。

「!!」

「ひっ…」

とどめに陰核に口壁を密着させ強く
吸い上げつつ、舌で強く舐め上げる。
陰核に強烈な刺激を受けた月英の腰が
一瞬浮き、そのまま崩れ落ちる。

「…ふあ あっ ああっ んっ
んああっ んっ だめっん
んはっ ふあっ あ」

…駄目
ふああ



腰に力が入らないらしく、月英の下腹部がこちらに委ねられる。膣内に指を二本入れ、高速で前後に擦り動かす。膣壁の前方上部を擦り続ける。

「ふああ あっ ああ あんっ
いく んっ だめっんああ
イキそですっ んあ ふあ
ん あ あ あああ

だめっ
イキそっ
あ あ

指の動きを限界まで速め、同じ所を擦り続ける。膣液が大量に分泌され続け、膣内が収縮を始める。大きく声を上げ、月英は快楽を迎え入れていく。

「んっは あ あ ああっ
プッ シャ ア ア ア ア ア ア ツ



叫声を上げて、月英が勢い良く後ろに仰け反る。同時に尿道口から、透明な液体が大量に噴出される。膣内が何度も痙攣し、月英の体も痙攣し続ける。

「イッて…しまいましたね…
凄く…良かったです…
スゴい… 凄いです……………」



暫くの後、月英は体勢を戻してこちらを向き、感謝の意を表す。大量の液体に塗れた性器は艶々に光り、何時までもひくひくと動いていた。

「嬉しい…達するなんて
とても久しぶりで…体が喜んでいきます」

月英は安心して寝台に横たわっていた。
暫くすると意を決したかのように立ち上がり、
こちらを寝かしつけ、その上に騎乗する。

「さあ…それでは結合させましょう」
陰茎を掴み、自分の性器にぬるりと押し当てた。



「それでは挿入しますね。」

結合される所を
どうぞ見ていて下さい」

月英はこちらの上に跨り、陰茎を
掴む。しっかりと握られた性器は
腔口にあてがわれ、彼女の腰が
ゆっくりと降ろされていく。



「んんんんんん…ん…んん…ん

ん…ん…ん
「んんんんんん」



ずぶり、ずぶりと陰茎が膣内に
挿入されていく。やがて
陰茎は根元まで全て挿入されて、
完全に月英の性器と結合する。

「全て入りましたよ……
あなたのおちんぼ。」

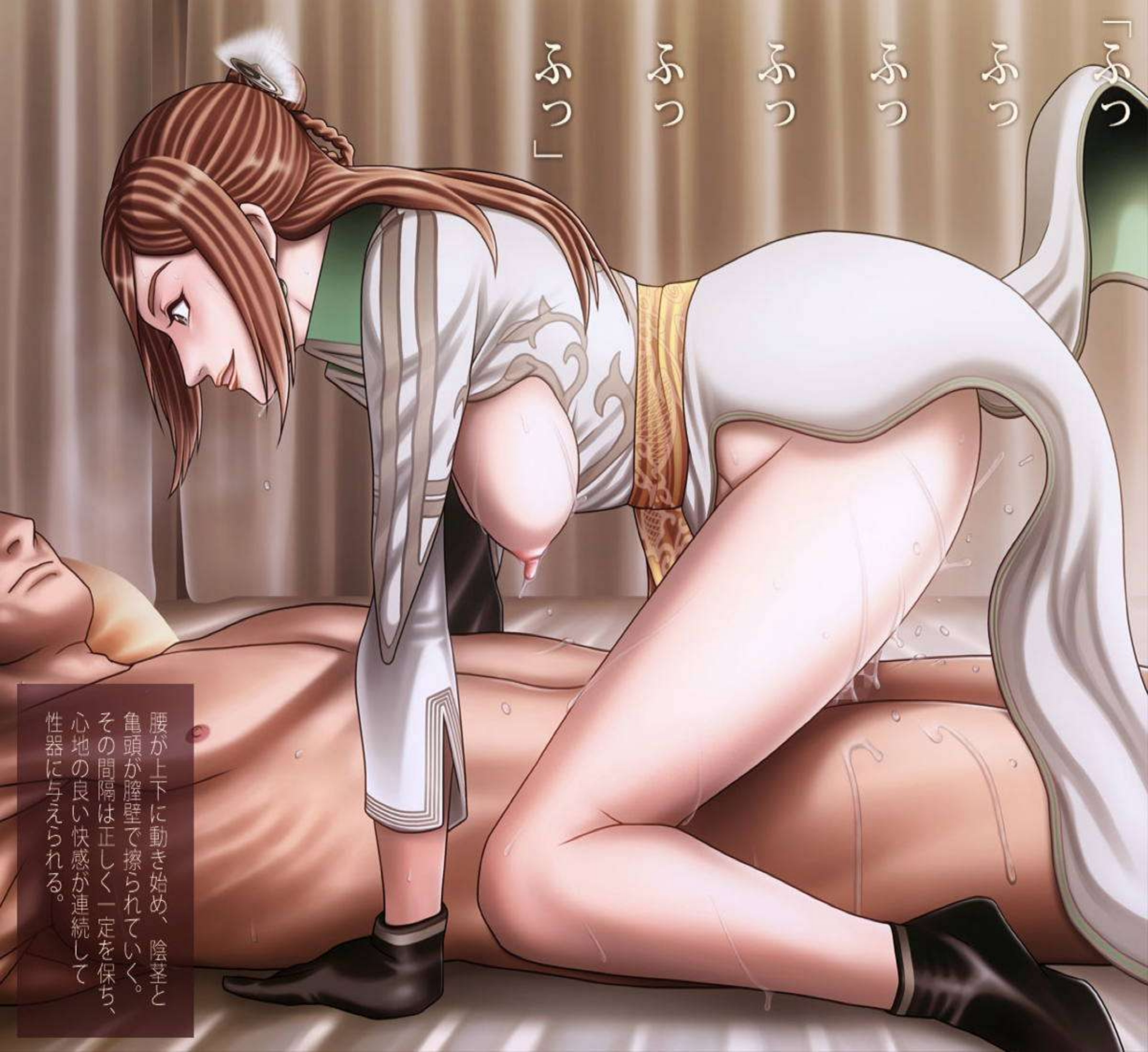
私の膣内で
大きく…脈打っています」

動かずに、月英とそのままの
体勢でじっくりと見つめ合う。
膣内は暖かく、ヌルヌルと湿り、
神秘的な充実感が全身を包む。



「私が…やります。
そのまま…
動かないで下さい」

長い間、月英は動かずに
目を閉じていたが、やがて
こちらを見ると、挿入された
性器を味わうかのように、
静かに腰をくねらし始める。



「ふ」

「ふ」

「ふ」

「ふ」

「ふ」

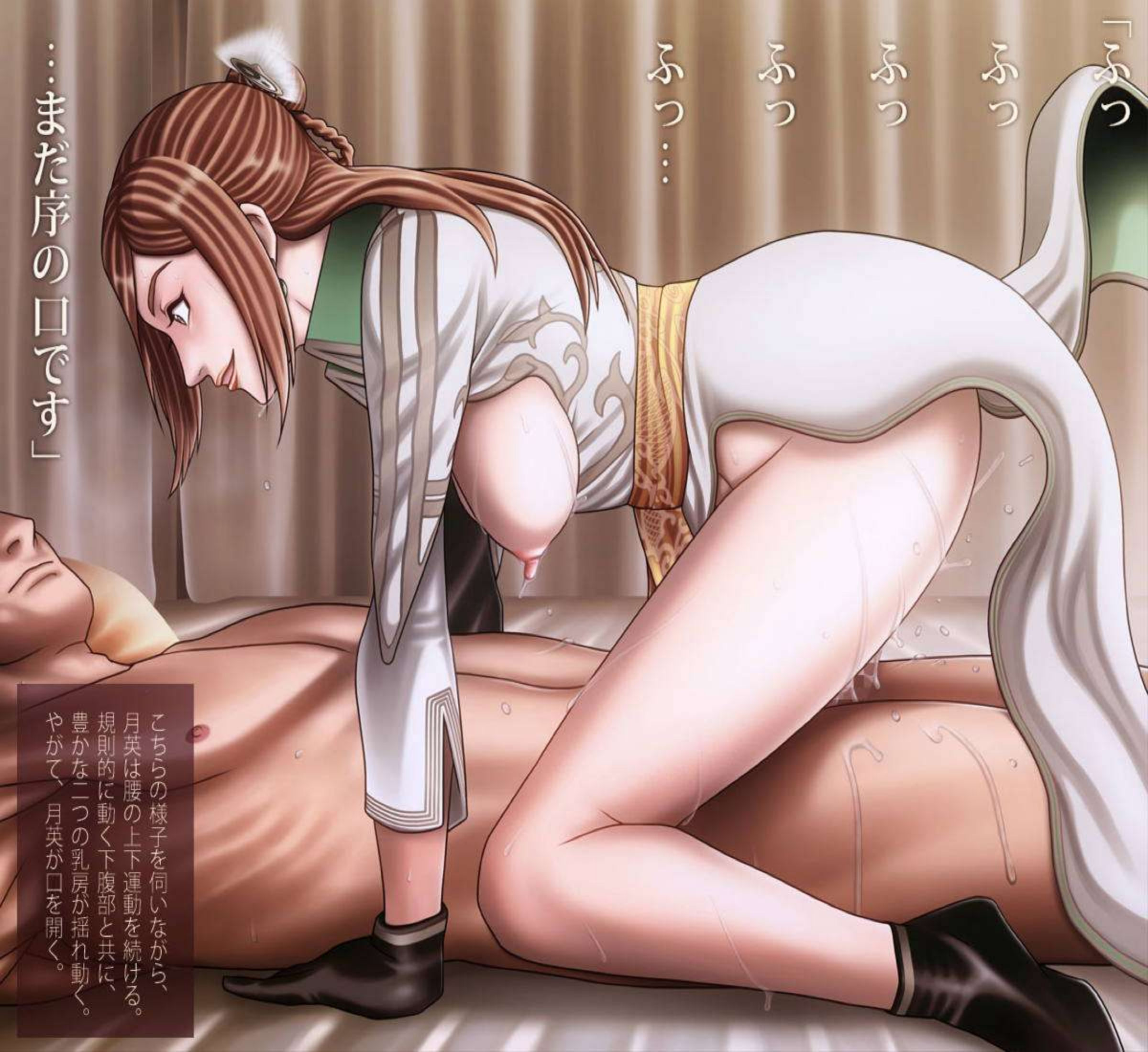
「ふ」

腰が上下に動き始め、陰茎と
龟头が膣壁で擦られていく。
その間隔は正しく一定を保ち、
心地の良い快感が連続して
性器に与えられる。

「ふっ
ふっ
ふっ
ふっ
ふっ……」

「……まだ序の口です」

こちらの様子を伺いながら、
月英は腰の上下運動を続ける。
規則的に動く下腹部と共に、
豊かな二つの乳房が揺れ動く。
やがて、月英が口を開く。

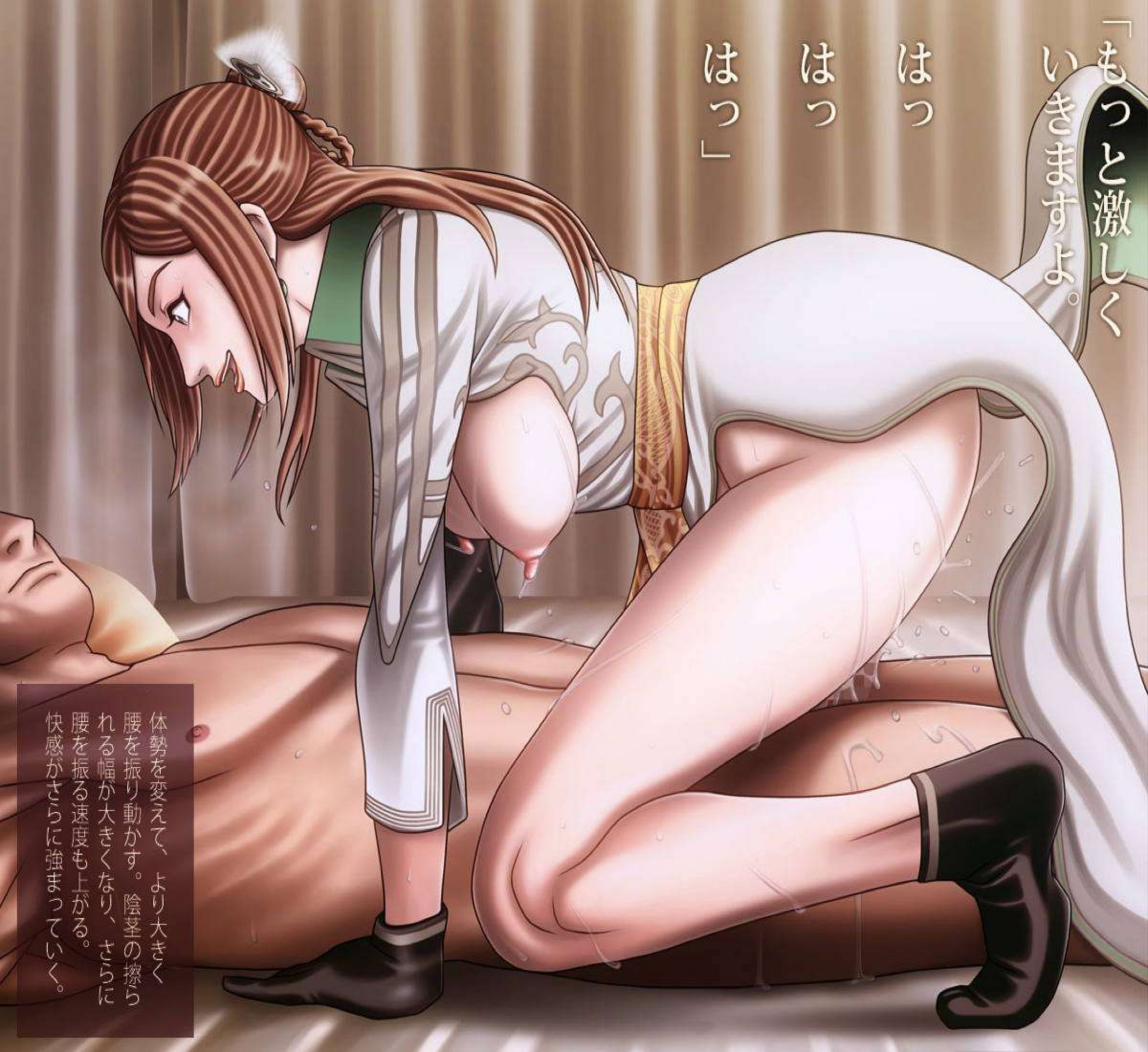


「もつと激しく
いきますよ。」

はっ

はっ

はっ
」



体勢を変えて、より大きく腰を振り動かす。陰茎の擦られる幅が大きくなり、さらに腰を振る速度も上がる。快感がさらに強まっていく。

「はあっ

はっ

はっ

あはっ

はっ

はっ」

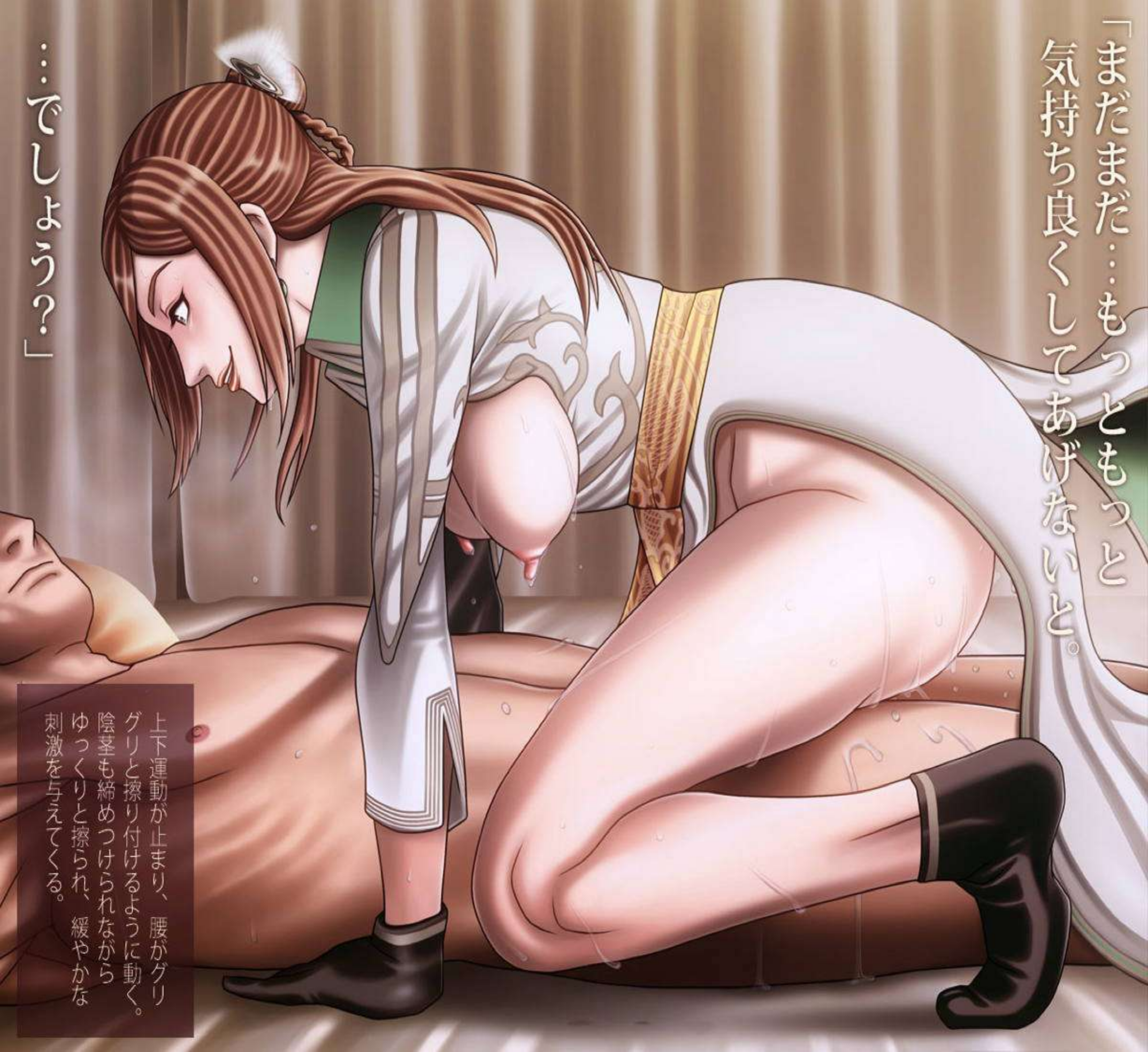


膣内の圧力も段階が上がり、
陰茎を強力に擦る。腰を
落とす度に、結合部一帯から
汗と分泌液が飛び散り、
乳房も一層激しく揺れ動く。

「まだまだ…もっともつと
気持ち良くしてあげないと。」

「…でしよら〜？」

上下運動が止まり、腰がグリ
グリと擦り付けるように動く。
陰茎も締めつけられながら
ゆっくりと擦られ、緩やかな
刺激を与えてくる。



「どうですかっ？」

は

ふっ

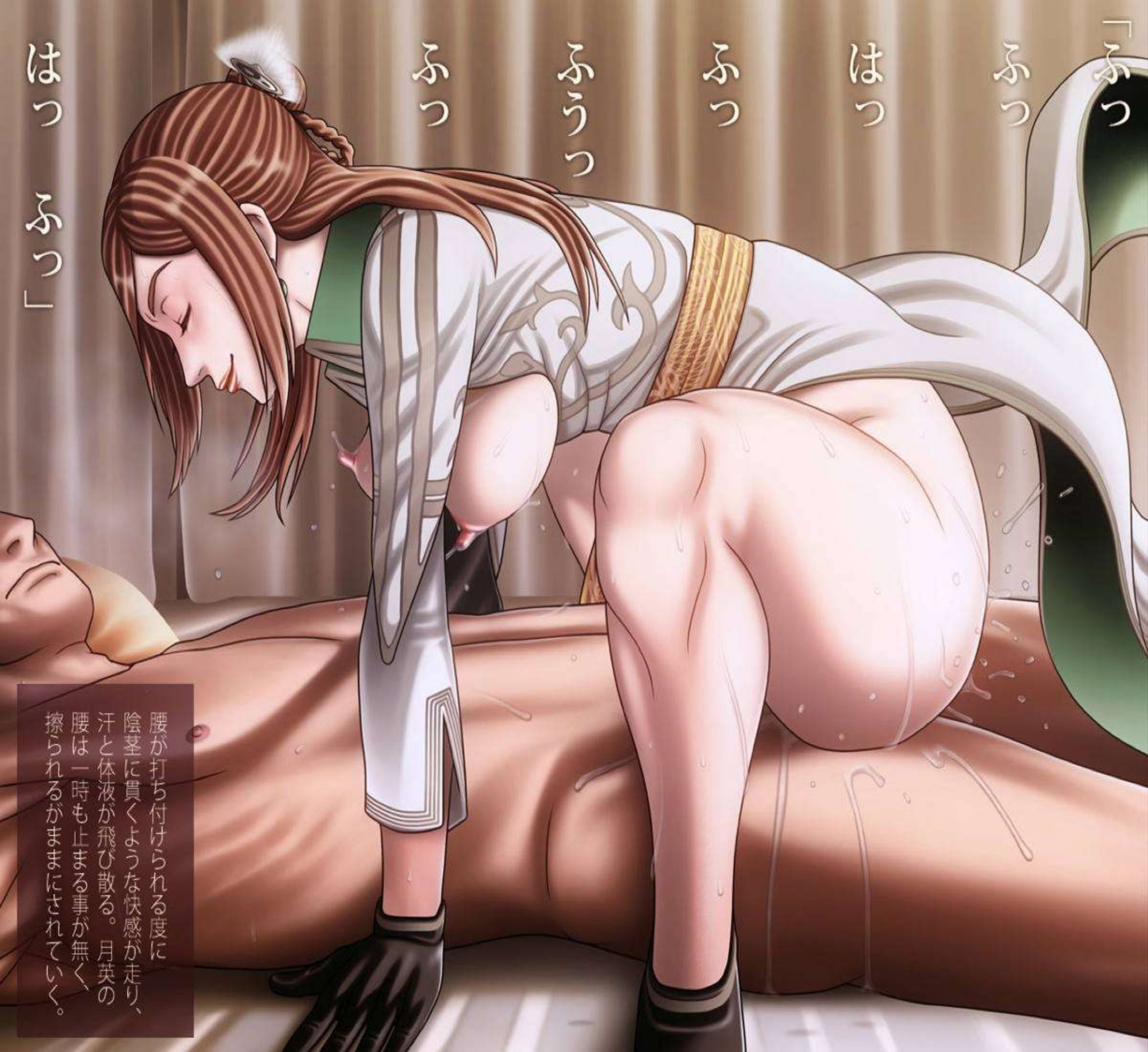
ふっ

ふっ

月英の
オマンコ如何です」

腰は膝上から動かされ、速度、
膣圧、擦りの深さ、全てが申し分無い快楽を味わう。
臀部が高く浮き上がり何度も何度も腰が打ち付けられる。





はっ
「ふっ」

ふっ

ふっ

ふっ

はっ

ふっ

「ふっ」

腰が打ち付けられる度に
陰茎に貫くような快感が走り、
汗と体液が飛び散る。月英の
腰は一時も止まる事が無く、
擦られるがままにされていく。

「この…月英の…」

はっ
ふらっ

はっ

はっ

はっ
ふらっ

はっ
ふらっ

はっ
ふらっ



腰の速度は衰えを知らず、
強力な臀部の打ち付けが続く。
膣内も強靱な締めりを保って
いる。だが、ほんの少しずつ、
月英の表情が曇りを見せる。

「オマ……おま……」

んふうっ

はっ

はあっ

ふうっ

ふ……

はあっ……はあう……ん」

腰の動きが一瞬止まり、月英の体が震える。膣内に変化は無いが、腰を動かす間隔が目に見えて遅くなる。喘ぎ声が少し甘くなってくる。

「はあ……」

はあ……

はあ……

はっ

はあっ

ふ……

ふあ……あっ……はっ



今までとは打って変わって
ゆっくり腰を落とし、前後に
緩やかに動かす。表情は虚ろ
で、頬が紅潮している。寸刻
の間、緩やかな動きが続く。

「は……」

は……

はあ……

はっ

はあっ

あの……

まだ

射精してはダメですよ」



休息した後、月英はまた腰を動かし始める。先程の速度は無いが、やや遅めに、ねっとり絡みつくような腰つきで性器を刺激してくる。

「まだダメっ」

ねっ？

まだっ

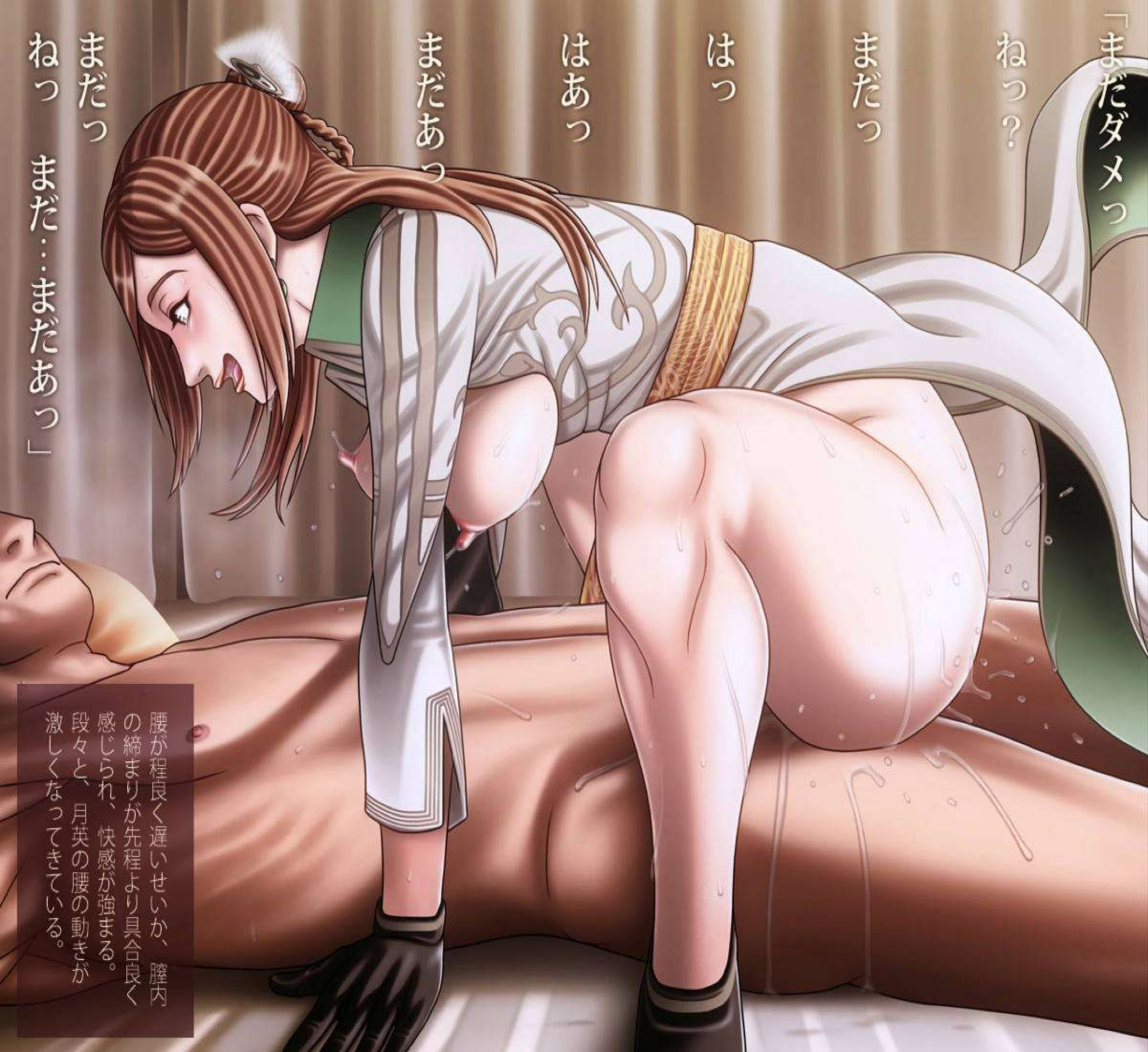
はっ

はあっ

まだあっ

まだっ

ねっ まだ…まだあっ」



腰が程良く遅いせいか、膣内の締めまりが先程より具合良く感じられ、快感が強まる。段々と、月英の腰の動きが激しくなってきた。

「出さないでっねっ」

まだっ

ふっ

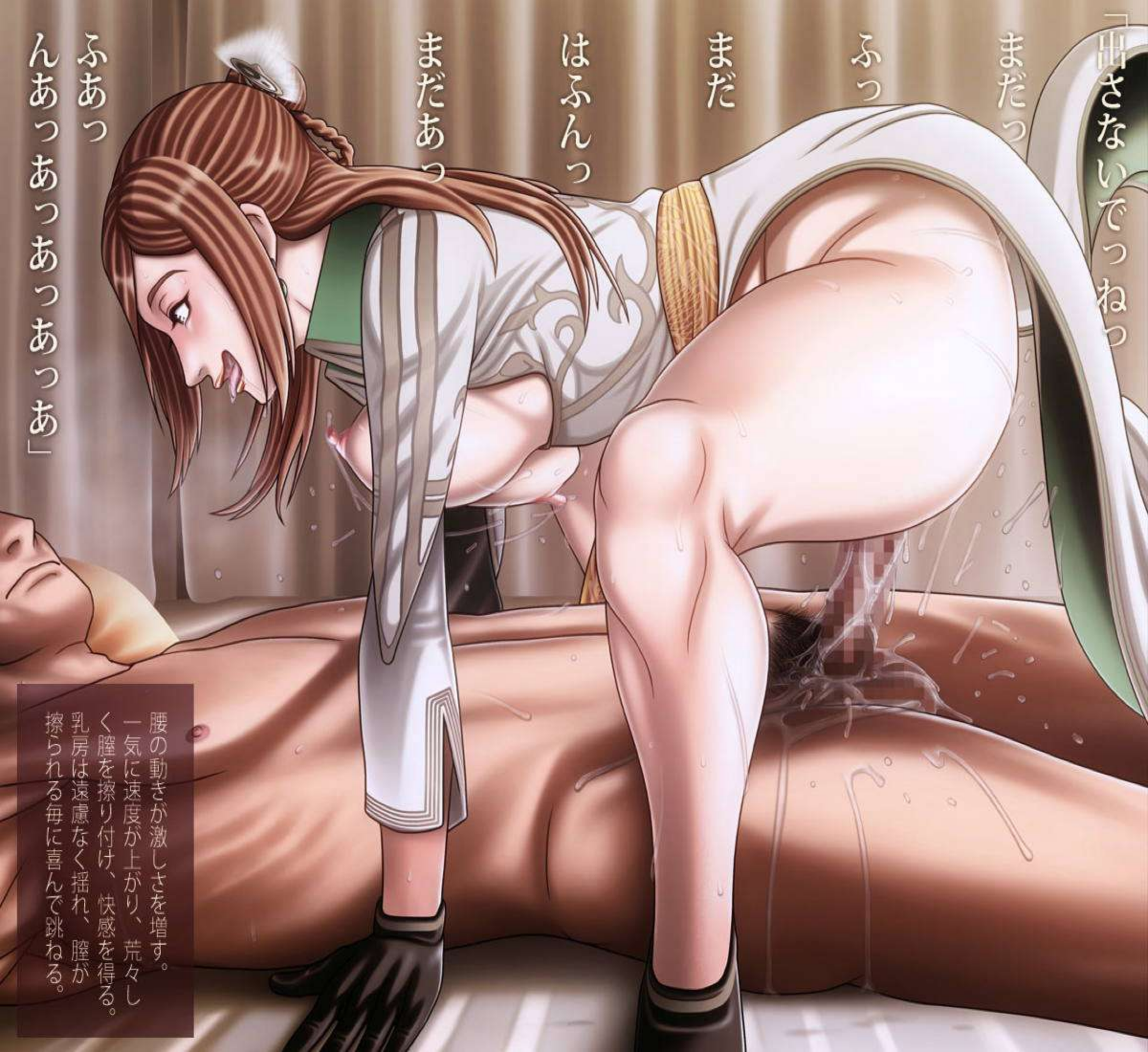
まだ

はふんっ

まだあっ

ふあっ

んあっあっあっあっあ



腰の動きが激しさを増す。
一気に速度が上がり、荒々しく
膣を擦り付け、快感を得る。
乳房は遠慮なく揺れ、膣が
擦られる毎に喜んで跳ねる。

「ああ……」

もう……

これ……

以上はっ

私っ

はうあっ

だめ……

はううあっ

だめっ」

月英は激しく腰を打ちつけながら、宙を見つめている。一点を見据え何事かを思っていた様だったが、膣内の性器が彼女を現実へ引き戻す。

「だめっ
だめっ
だめっ
だめっ

だめなのっ

ひい

だめっ

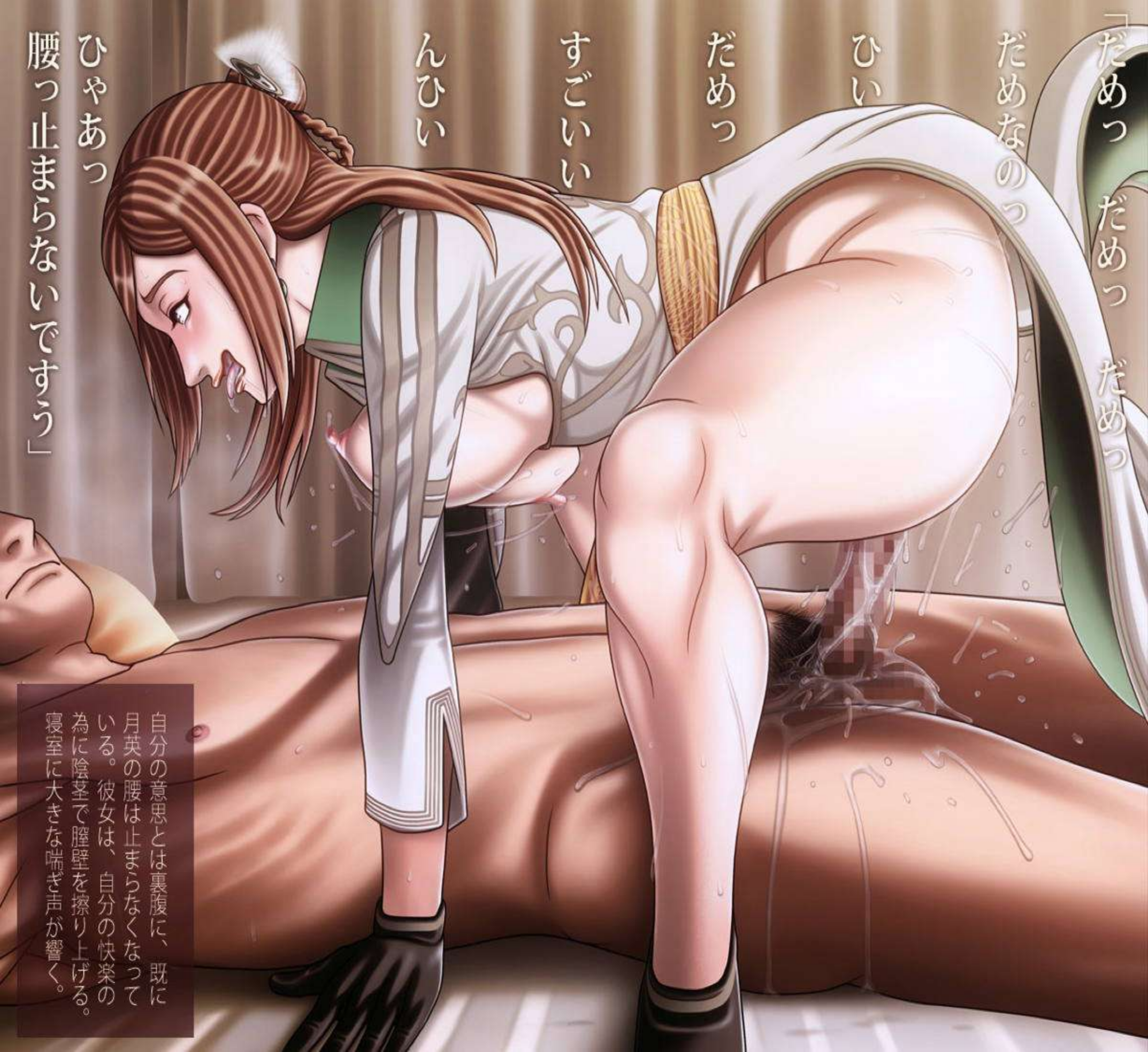
すごいっ

んひい

ひゃあっ

腰っ止まらないですっ

自分の意思とは裏腹に、既に月英の腰は止まらなくなっている。彼女は、自分の快楽の為に陰茎で膣壁を擦り上げる。寝室に大きな喘ぎ声が響く。



「凄いつ おまんこヌゴいの

んひやつあ

んひいつ

すごいつ

すごおつ

んひい

ひやあつ
ひやあつ
ひやあつ

ひやあああああ

張り詰めた糸が切れたように
月英は声を上げ、動物のよう
に腰を動かす。膣はこれまで
になく陰茎に吸い付き、膣奥
が何度も亀頭を掠めていく。

「あーだめイクッ
またイきますっ」

はあ

はあ

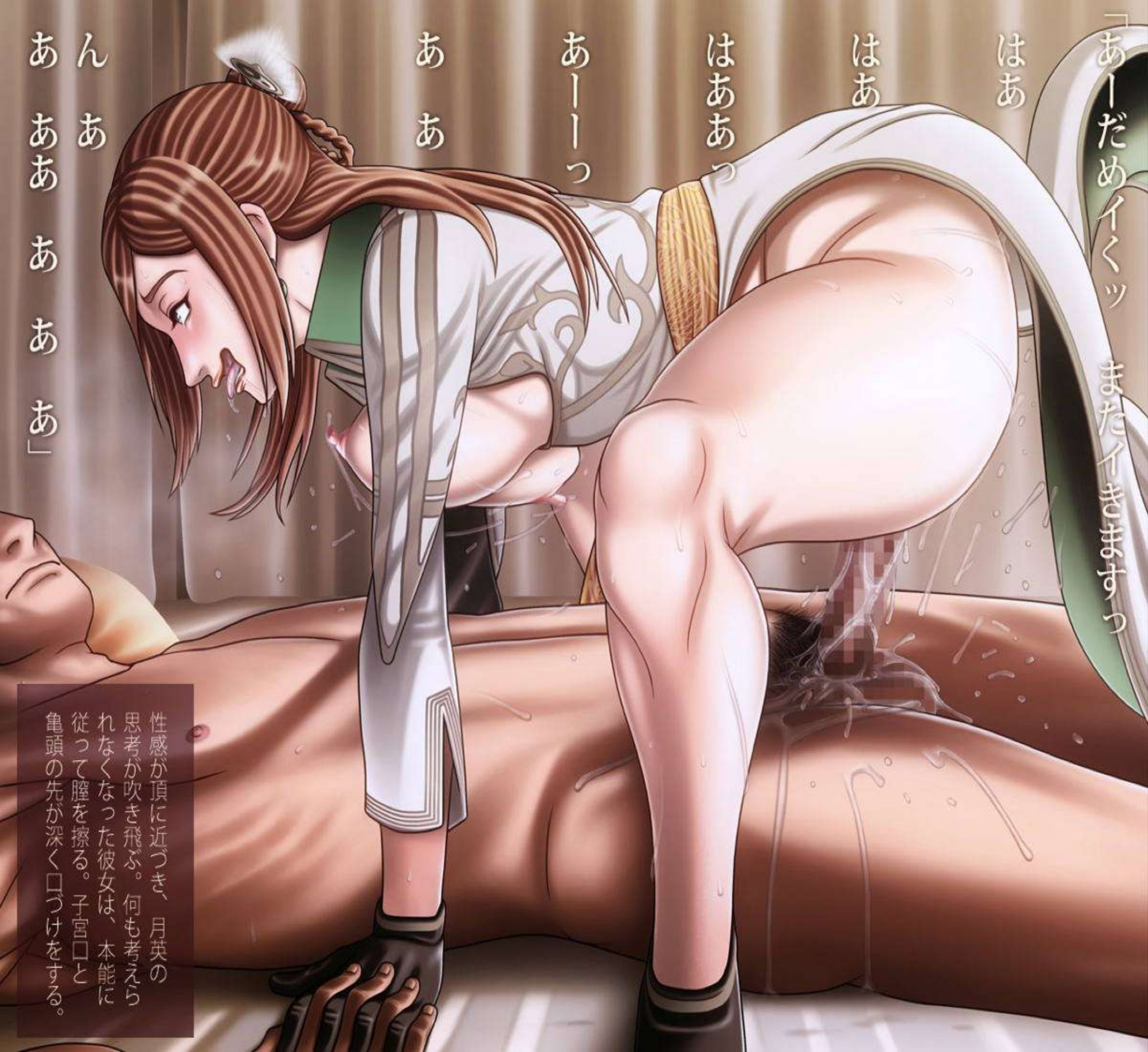
はああっ

あーっ

ああ

んあ
ああ
ああ
ああ

性感が頂に近づき、月英の
思考が吹き飛ぶ。何も考えら
れなくなった彼女は、本能に
従って膣を擦る。子宮口と
亀頭の先が深く口づけをする。



「イクっ おまんこイくのっ

ひあっくるっ

くるくるっ

はああっ

あーっ

イクっ

あっイク
イクっ
イツ
くあ
あ

子宮口と亀頭の先を密着させ
たまま、月英は絶頂を迎える。
膣全体が収縮し、腰が激しく
痙攣する。押し寄せる快樂に
月英はただ、身を任せていた。

「……もう……どうなっても……
でも」

そのままの体勢で、長い間月英は快感に震えていた。そしてやがて、こちらの胸板に顔を伏せる。性器を結合したまま、月英は次第に息を整えて行く。

顔が上げられ、両目がこちらを見据える。その眼には、強い意志が感じられる。

「あなたを呼んだからには、
射精させなくてはなりません」

断固とした口調で言う。

尊厳と誇りが、彼女に戻って来たようだった。

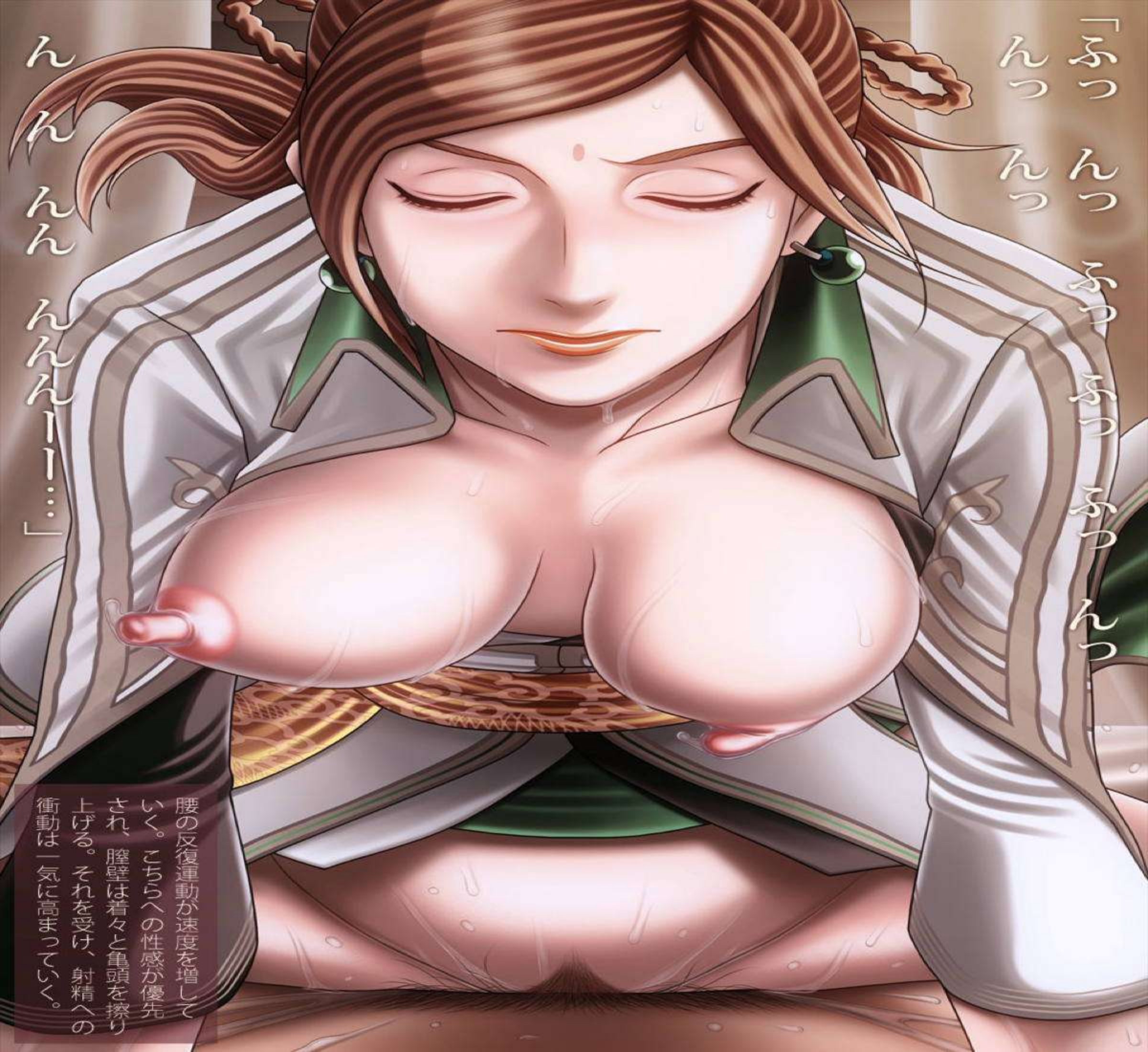


「駄目です。

まだあなたは射精していません。

必ず膣内射精するのです」

下半身に力を入れて、月英は腰を動かし始める。計算された腰の動きが的確に陰茎を刺激する。こちらを射精させる為に、彼女は自ら体を動かす。



ん
ん
んん
んん
んん
んん
「……」

「ぶっ」
んっ
んっ
んっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ
んっ

腰の反復運動が速度を増して
いく。こちらへの性感が優先
され、膣壁は着々と亀頭を擦り
上げる。それを受け、射精への
衝動は一気に高まっていく。

「はーっ
はーっ
はーっ

はあっ
はあっ
はあ……」

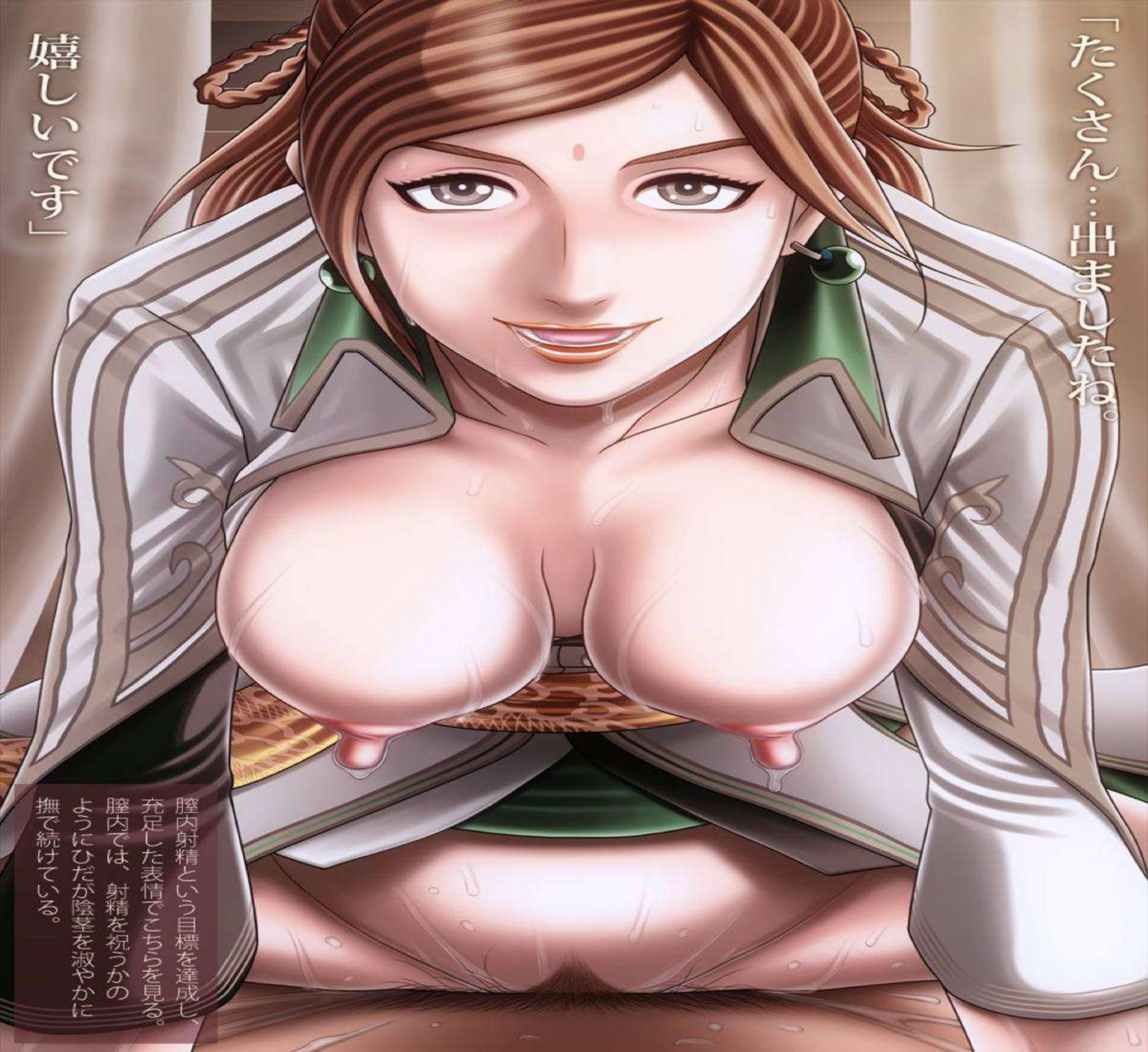


射精が止まる。子宮には放たれた
精液がたっぷりと収められる。
月英は次第に呼吸を整えていく。

「たくさん…出ましたね。」

「嬉しいです」

膣内射精という目標を達成し、充足した表情でこちらを見る。膣内では、射精を祝うかのようにひだが陰茎を淑やかに撫で続けている。



「おちんぼがまた中で
大きくなつて来ていますね。」

「まだやれるでしょう」

膣内の締め付けが激しくなり
陰茎が再び勃起していく。
それを感じ取った月英は舌を
舐めずって喜び、半ば強制的に
性交を続行し始める。

「私の目を見なさい。」

見つめ合いながら
再び射精するのです」

瞳を見る事を強要され、腰を
何度も熾烈に動かされる。
性器は膣壁によって強力に擦り
上げられていき、射精衝動が
再び立ち昇ってくる。





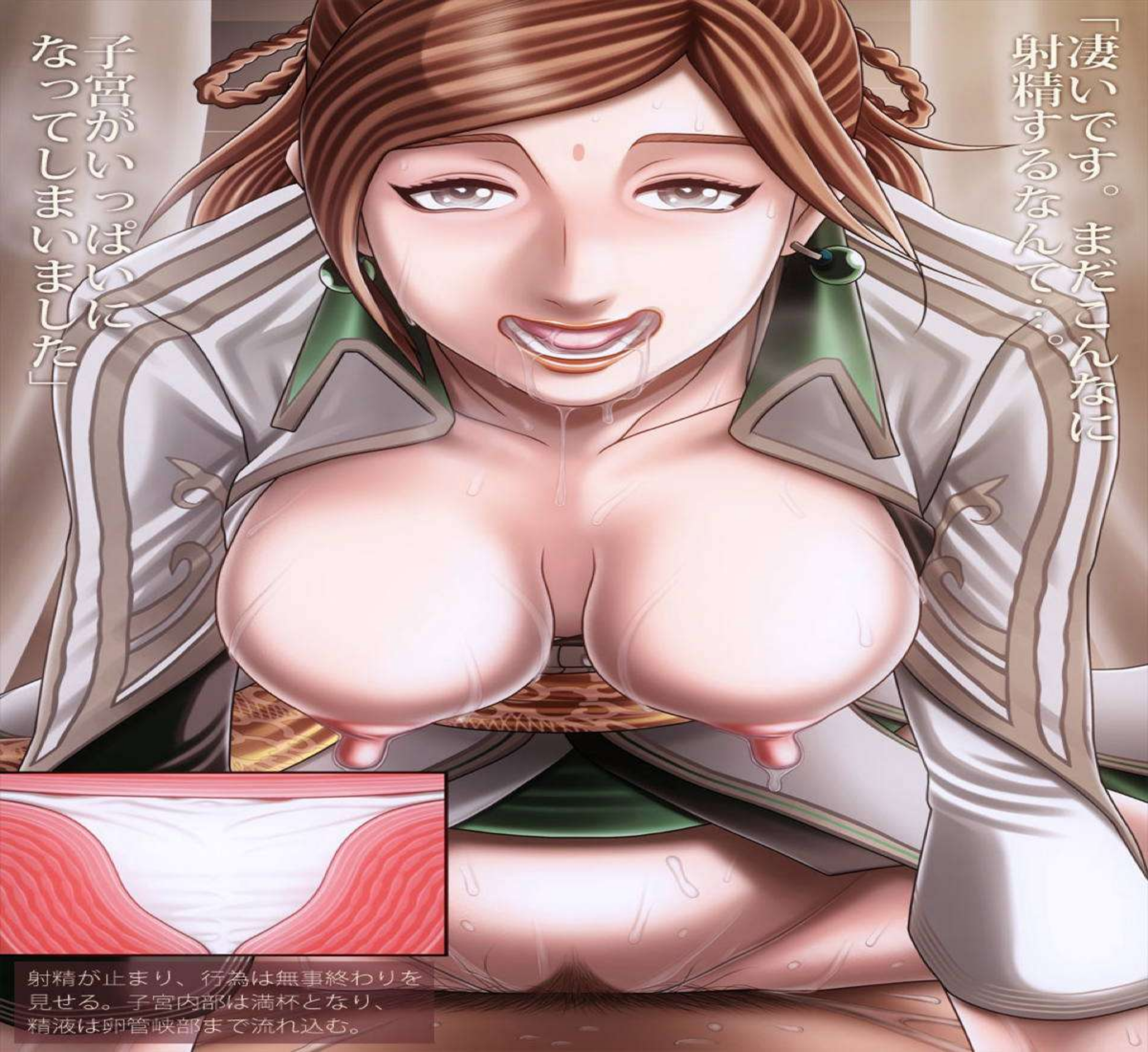
ビュルル
「あはあっ」
ツ

「また来ましたあっ」

見つめ合いながら、また子宮へ
射精する。喜びの声を上げて
月英はもう一度体内に精子を
迎え入れる。再び精液が
子宮内部へと注入されていく。

「凄いです。まだこんなに
射精するなんて……」

「子宮がいっぱいになっ
てしまいました」

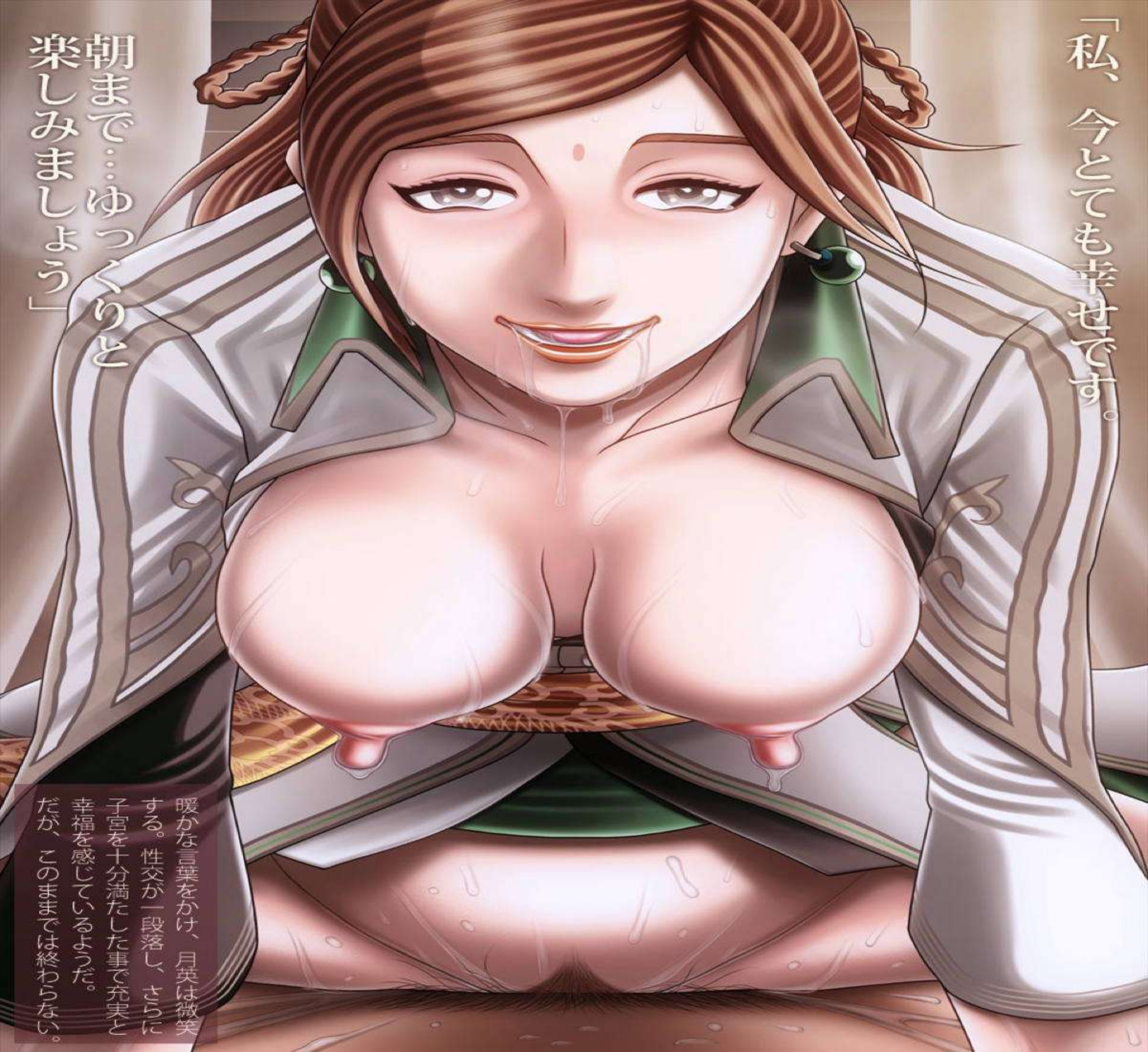


射精が止まり、行為は無事終わりを
見せる。子宮内部は満杯となり、
精液は卵管峡部まで流れ込む。

「私、今とても幸せです。」

朝まで…ゆっくりと
楽しみましょう」

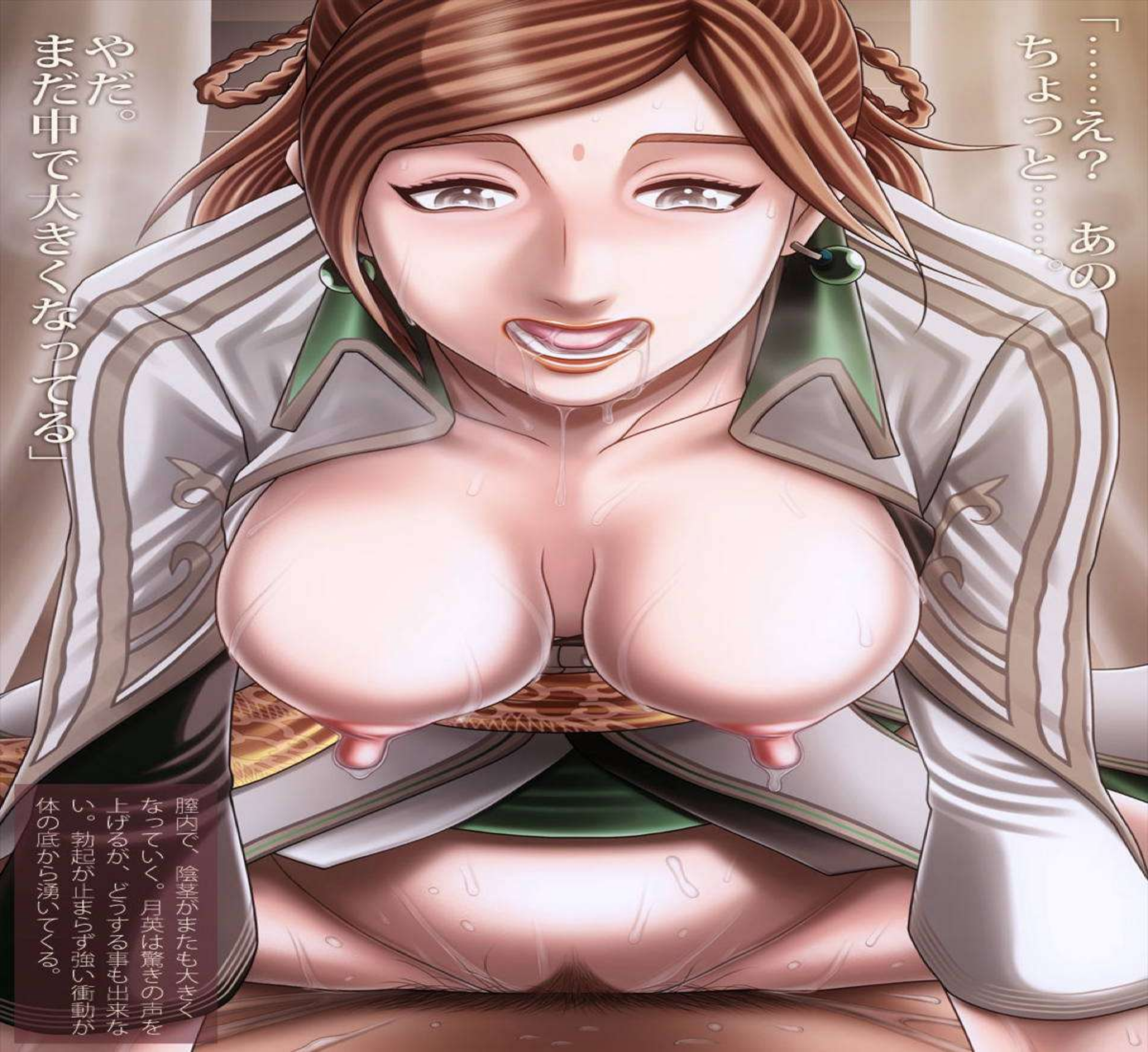
暖かな言葉をかけ、月英は微笑する。性交が一段落し、さらに子宮を十分満たした事で充実と幸福を感じているようだ。だが、このままでは終わらない。



「…………え？ あの
ちよつと……………」

やだ。
まだ中で大きくなってる」

膣内で、陰茎がまたも大きく
なっていく。月英は驚きの声を
上げるが、どうする事も出来な
い。勃起が止まらず強い衝動が
体の底から湧いてくる。



「嫌です。もうお腹が
いっぱい……もうこれ以上は……」

ねっ もう
やめてください」

込み上げる衝動を抑え切れず
腕を掴み、腰を動かし始める。
月英は宥めるが、快楽を得る為
に動く体を止められず、膣壁に
陰茎を強く擦り付ける。

「ふあっ 駄目っ
これ以上はっ

あっ

やっ ああっ
おかしくなっ
ほうっ

腰を動かす度に、月英が大きく喘ぐ。度重なる射精で膣は敏感になり、彼女の限界が近づく。涎が垂れ流され、その表情が徐々に快楽に崩れていく。

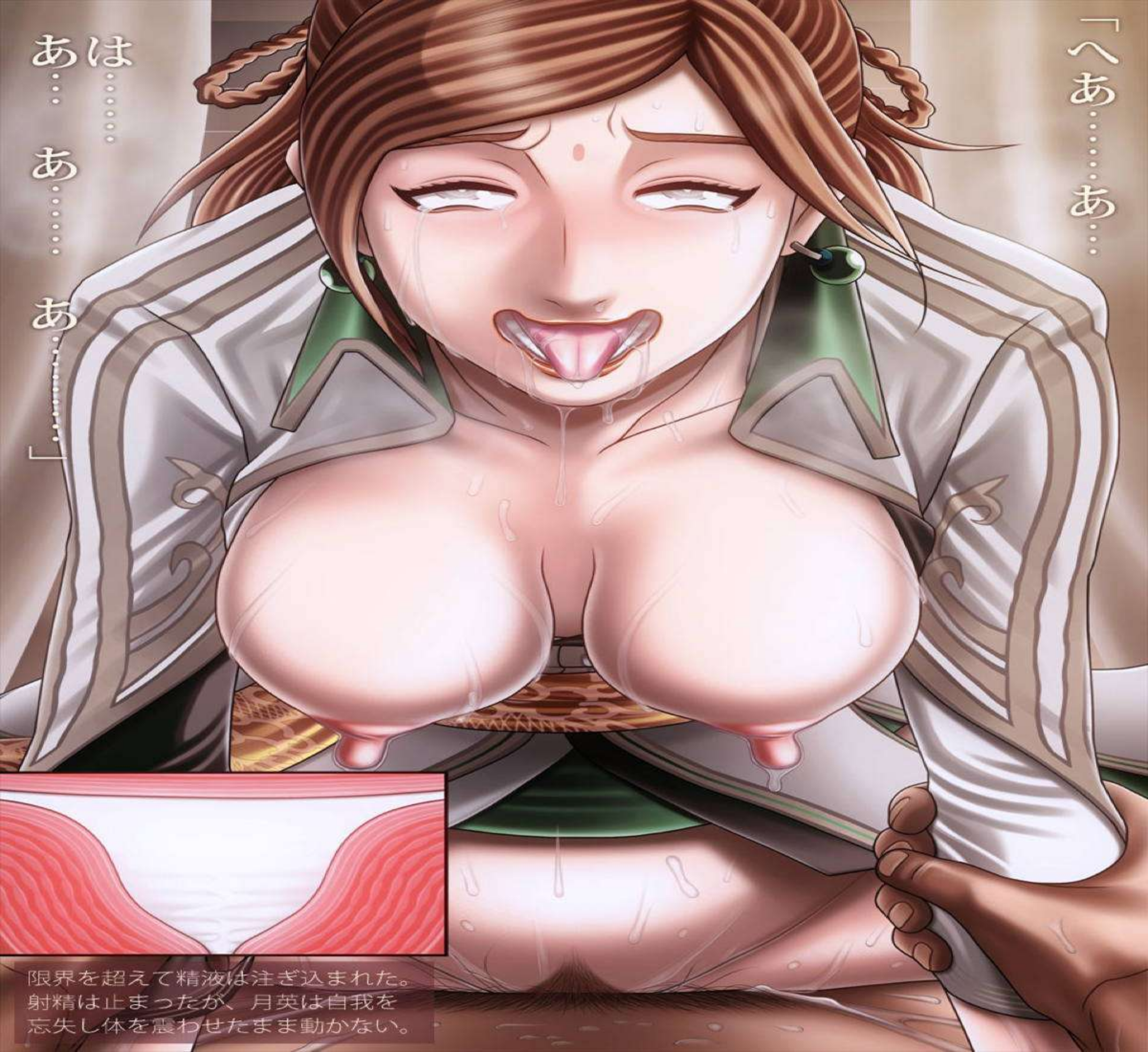
「ふあっ だめっ
ひだしちやだめっ

やだめっ ひっ
んはあっ ひゃあっ
んひい」

獣のように性器を突き続けていくと、やがて月英は理性を失ったのか、言葉にならない声を発し始める。それでも腰は止まらず、絶頂へと向かっていく。

「へあ……あ……あ……」

あは……
あ……
あ……



限界を超えて精液は注ぎ込まれた。射精は止まったが、月英は自我を忘失し体を震わせたまま動かない。

「あなたの…オチンポ…
すごすぎます…」

私…もう…
あなた無しでは…」

陰茎がようやく膣内で縮小して
いく。膣と体を激しく痙攣させ
ながら、月英はやっと言葉を発
する。そして、蕩けた表情で
こちらを見つめて続けていた。



力尽き、月英はそのまま前に倒れ込む。

胸板の上で涎を垂らしながら、激しく息を上下させている。
こちらにも精根尽き果て、ぼんやりとその様を見つめる。

暫くの間そうしていたが、ふと思い、

何故このようなことを考えついたのかと、月英に尋ねた。
すると、月英は頭を動かさしこちらを見遣った。

「…寂しかったのです」

月英は心情を吐露し始める。



「孔明様もお亡くなりになってしまい、子供達も大きくなって別の屋敷で暮らしています。私は独りで…寂しくなってしまったのです」

月英は真つ直ぐにこちらの目を見ながら、理由を述べた。

その表情に、後悔や自責は見当たらない。

「私のわがままに付き合わせてしまって、申し訳ありません」

臥龍の妻の瞳は、曇りなくこちらを見抜いている。

成都の夜が更けていく。

朝までは、まだたっぷりと時間があった。

「もっともっと…愛してくださいませね」

月英は満面の笑みを浮かべていた。

黄成逢月

製作

近江狄道

CG・本文作成

近江ケイ

T h a n k y o u F o r R e a d i n g .
K e i O r m i

「んっぷっかん んふうっ ゴクッ ふ ゴクンッ

ビュルルル————ビュルッビュルルーツ

口を離されるより速く、口内へ射精する。計算は狂ったが、月英は瞬時に動きを止め精子を飲み込む。口腔から咽頭にかけて性器は固定され、喉奥で放たれる精液が次々と吞まれていく。

「はーらーらーらー」

ビュルルルルル

ああっ

あっ

はあ…

あー…

あー…

射精…

されて…いまあ…す」

月英が絶頂を迎えると同時に、
膣内へ思い切り射精する。
月英は一瞬腰を跳ねらせるが、
すぐに膣を固定し、射精され
る快楽を存分に味わっていた。



「おへそですか？
こうでしよるか」

腰帯が緩められ、胸から腹部にかけて月英の肌が露出される。彼女は興味ありげに、臍部をこちらの目の前に放り出す。

「まあ
オチンポ出して……。」

凄い。とても
勃起していますよ」

こちらも性器を露出し、真正面に立つ。勃起した陰茎を凝視されながら、臍部と龟头の位置を直線上に合わせていく。

「あらまあ。
自分でするなんて……」

「凄く速さ。
興奮してますね」

臍部と亀頭を密着させ、陰茎をしごき始める。多少驚いたが月英は趣旨を理解し、臍部を固定させて行為を見つめる。

「良いですよ。
そのままイッて。」

「イきますか？イきますね？
イッて。イッて。
ほらっイッて下さい」

見下ろされて多数の言葉が投げ
掛けられ、手の動きが高速化す
る。臍部に強く擦り付けている
亀頭に、精液が昇ってくる。

「はあああああっ
熱っつうっつ

ビュルルルッ

出てますっ
精液出ていますねっ

ビュルッ

ビュルッ

臍部に密着させたまま、勢い良く射精する。圧迫された精液が飛び散るが、月英は声を上げてそのまま射精を受け入れる。



「は……あ……あ……
あ………」

あ………はあ………
はあっ はああっ」

精液が臍部一带にべったりと張り付き、下腹部へ垂れていく。月英は臍部に射精された感触を余すこと無く味わい続ける。



「おへそも中々
良いものですね。」

私も少し…
興奮してしまいました」

こちらを見下ろし、月英は納得の表情を見せる。新しい性感を知れた事の喜びが、その両眼にありありと浮かんでいた。